

解放闘争国際情報 NO.1

連帯

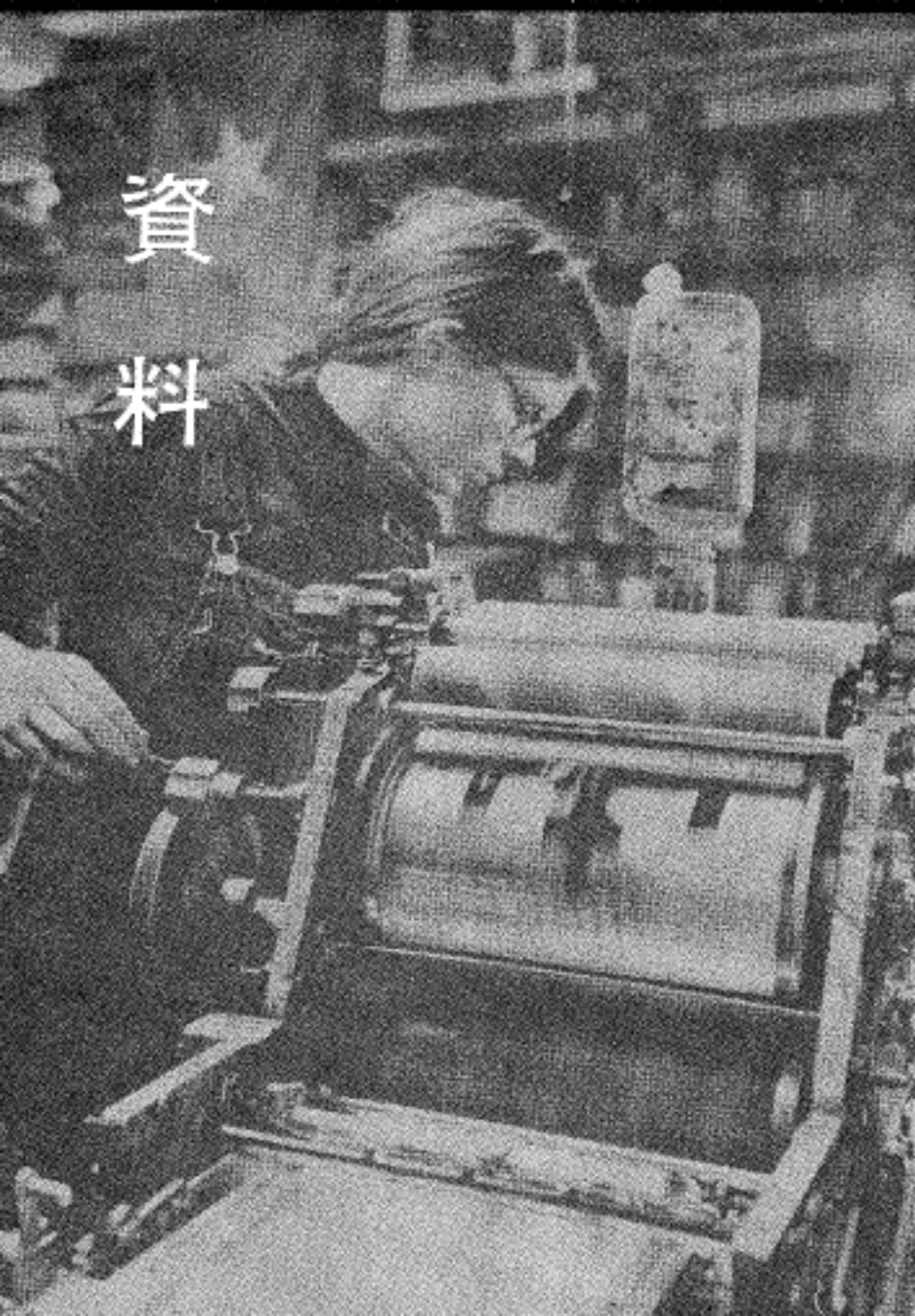
SOLIDARITY

インドシナ革命戦争

勝利する人民戦争とその主体の解明

RENTAI

資
料



〈資料1〉

南ベトナム革命の攻勢戦略

〔解説〕ここに掲載する「ナムハイ論文」は、南ベトナム解放民族戦線が、テト攻勢の約一年後に発表した重要論文で、われわれの知らないかぎりどこでも紹介されたことがない。これは、一九五四年のジュネーブ協定以来の南ベトナム人民の闘いを三段階にわけ、第一段階をジュネーブから解放戦線結成（一九五四—一九五五年）、第二段階を「特殊戦争」（一九六〇—一九六五年）、第三段階を「局地戦争」すなわち米軍の大量投入の時期にわけているが、南ベトナム解放通信はとくに第三段階の部分について部分的に報道している。見出しにもあるように南ベトナムにおける革命の戦略を「攻勢戦略」と規定しており、一九六八年春のテト攻勢は、第三段

階の時期にあたり、「全面的攻勢戦略」が展開されたと述べている。解放戦線はこの論文が出される約一年前に出されたチョンソン論文「一九六六—六七年の冬・春期における勝利とその教訓」をのぞいては、戦略問題にかんする理論的論文を発表したことが少ない。そのことを考慮に入れるとこの「ナムハイ論文」が、ジュネーブ以来の南ベトナム革命の全時期において、「攻勢の戦略」が貫徹されたとのべていることは注目にあたいする。このことは従来の反帝・民族解放戦争の三段階論（戦略的防御・反攻準備・反攻）を発展させかつ止揚し、新しい情勢、すなわちアメリカによる新植民地主義侵略にたいする人民戦争の時代における戦略を規定

したものであるといえよう。

この論文の著者ナム・ハイ氏についてはこれはペンネームであろうが、おそらく人民革命党の書記長でありかつ革命政府の国防大臣であるチャン・ナム・チュン氏であるかまたは彼に近い解放軍の指導的立場にある人が書いたものと思われる。

一九六九年一月一五日——南ベトナム民族解放戦線創立(二月二〇日)八周年にあたり、南ベトナム解放通信(G・P・A)は「攻勢と蜂起は、南ベトナム革命の攻勢戦略の必然的發展である」と題する重要な分析を發表した。

著者ナム・ハイは、「南ベトナム革命の正しい創造的な攻勢戦略」を實行することにより南ベトナム人民解放武装勢力と人民が獲得した偉大な勝利をふりかえり、そこからまた、アメリカの侵略に対する抵抗戦争における南ベトナム人民解放武装勢力と人民の主要な経験を引き出した。

彼はいう。一九六八年の総攻勢と蜂起の輝かしい勝利は、まさしく革命的攻勢戦略の創造的適用の所産であり、アメリカ帝国主義侵略者とその追従者どもに対する、一九五四年以来過去一四年間の絶えまない不屈の闘争における、わが軍と人民全体の攻勢戦略の必然的發展である。

これらの輝かしい勝利は、ベトナムの現実に革命理論を適用するわれわれの創造的精神の大きな成功である。それらは、南ベトナム革命によって提起された苛烈な諸問題を解決するにあたり、路線と原則におけるわれわれの正しい指導と軍事技術の熟達した適用を雄弁に物語っている。

「南ベトナム革命のこの、まさに正しい創造的な攻勢戦略」と題する最初の部分で、ナム・ハイは今の時代を全面的革命攻勢の時代と特徴づける。フランスの植民地支配を通して、ベトナム革命の攻勢的な立場を分析したのち、次のように述べている。一九五四年のインドシナにおける平和の回復以来、米国リゴ・ジン・ジュム・ファッシュ体制下の暗黒時

代に続いて、わが人民は、かいらい機構を根本からガタガタに打ちくだくために決起し、多くの広大な地域で、敵の支配を打倒した。それ以来、敵は何度も兵力と武器を増大せしめなければならぬが、わが軍と人民は、攻勢的立場をゆるぎなく堅持し、一つ一つ敵の作戦計画の裏をかき、敵の「特殊戦争」戦略を失敗に帰せしめ、「局地戦争」戦略をその最初の段階でくつがえし、みずからの攻勢を打ち固めつつ、敵を守勢と未曾有の混乱と苦境とに追いこんでいる。

過去の闘争の發展は、攻勢戦略が絶対に正しいことを立証しており、わが人民の革命に完全な勝利をもたらすであろう。この攻勢戦略は、われわれの時代の特徴から、ベトナム革命の実践的条件から、そして一般的にはベトナムの戦場、そして特殊には南ベトナムにおけるわれわれと敵の間の力の均衡から導びきだされる。

わが情勢と敵の情勢の客観的かつ科学的分析を通して、われわれは、単にわれわれの位置と強さと、豊富な経験と不屈の闘争の長い伝統を持つわが人民

の無尽蔵の潜在的な力を正確に評価してきたばかりでなく、敵の性質と全般的な戦略上の計画を見ぬき、敵の戦略・戦術目標・具体的方策をしっかりと把握し、アメリカとそのかいらいどもの強いところと弱いところ、そして本当の力を正確に評価してきたのである。われわれがこれまでいつも正しい路線と正しい政策を作りだし、攻勢戦略を維持し、たえず發展させ、一層大きな勝利をたびたび獲得してきたのはそういうわけである。現実によって検証された正しい路線と正しい政策により、われわれは新しい攻勢的な力を獲得してきた。それは、指導機関の有能かつ明敏な指導、われわれの攻勢戦略の不可避的な成功、そしてわれわれの最終的な勝利へのわが全人民の全幅の信頼である。

南ベトナム人民のさまざまな闘争段階を通して革命戦略の正しさを論証したのち、筆者は次の結論に達する。

一九六八年の総攻勢と広汎な蜂起は、南ベトナム革命の過去の勝利をもたらした攻勢戦略の必然的發展

展である。

事実一九六七年には、アメリカは、もはやその前年と前々年の二つの乾期に行なった大規模な攻勢への反撃に着手しようような位置にはいなかった。これとは反対にわが軍と人民は、もっぱら攻勢を保ちつつロク・ニン、ダクト、クアン・ナム、クアン・チなどにおける著名な戦闘を開始し、われわれの攻勢を迎えうつために、敵がその軍隊をいたるところに転じることを余儀なくさせた——海兵隊は山岳地帯にさしむけられ、空挺部隊と敵の機動力である機動歩兵部隊はいたるところで守勢に回るよう、ばらばらに分散させられた。最近一九六七年、われわれが「敵の頭上を越える」位置で闘っていることが明らかになって以来、われわれの軍事的政治的力量はまた、質的にも量的にもともに力強く発展してきた。

その支配下の百二十万の軍隊をもってしても、敵の地位は明らかに弱まっており、アメリカと、そのかいらい軍の戦闘能力はひじょうに低下してきており、かれらは戦略的にも戦術的にも戦闘における有

効性を喪失してきている。

いっぽうかいらい政権は、熾烈な内部抗争によって分裂している。ベトナム侵略戦争による甚大な損失とその明白な失敗は、アメリカ国内の反戦運動の炎をおおりにたて、広げつつあり、米支配層内の分裂を深めている。敵の地位が低下するいっぽう、われわれの地位は上昇しつつあり、敵の力がひじょうに減少するいっぽう、われわれの力は急速に強化されており、アメリカとそのかいらいどもが進退の岐路で困惑し、苦境につまり、悩ませられているいっぽう、わが軍と人民は力強い気迫に満ちて突進している。このような情勢は、南ベトナムの軍と人民が新しい局面——すなわち間断なき攻勢と広汎な反乱の局面に切りかえる、まさしく新たな絶好の機会を生みだしてきた。

一九六八年春の始まりとともに、アメリカとそのかいらいどもも中央から末端にいたるまでの重要な拠点、わが軍と人民による広範囲の、そしてほぼ

同時に未曾有の強烈さを持った攻勢にさらされた。わが三軍全体は、わが政治勢力と密接に共同して、三つの領域（平地・山岳地帯・都市——解放通信）における全戦場で作戦を実施し、最近の敵の隠れ家の奥深く攻撃した。

わが軍と人民は、アメリカとそのかいらいどもに、仰天するほどの打撃を与え、全世界をゆるがした。早春における総攻撃と広汎な蜂起のほんの一月のうちに、わが軍と人民は、かいらい軍の全人員の三分の一を掃蕩し、解体させ、米軍の戦闘部隊の五分の一を抹殺もしくは掃蕩し、米軍の航空機の三分の一と機動車両の三分の一と南ベトナム駐留の米軍部隊の軍需物資の重要な部分を破壊した。われわれはまた、敵部隊を掃蕩もしくは、敵部隊が投降するかあるいは、その拠点の五分の一を放棄するかのいづれかを余儀なくせしめ、多くの広大な領域にわれわれの支配を拡大し、一五〇万以上の人民を解放した。われわれは、人民に対する残忍な罪により、多くの残虐な敵の手先どもを処刑し、かいらい政権

の重要な部分を不能にさせ、もしくはその崩壊を引き起こし、さらにかいらいどもを震撼せしめ、彼らを深刻な困惑に駆りたてた。

一九六八年早春の勝利はきわめて重要な意義を持っている。その時以来われわれは、短期間に、戦闘の状態を完全に変化させ、敵の最後の隠れ家に戦争を持ち込み、力の均衡を、われわれに有利なようにすばやく変え、新しい情勢と新たな可能性を秘めた新しい戦略拠点を創造した。百万を越すアメリカ軍、かいらい軍、同盟国軍はその巨大な火力、空軍の機動力、そして電子計算機にもかかわらず、中世の戦争の戦略（彼らの最後の要塞を防衛するため）に部隊を引きもどす——一九六八年二月一日、サイゴン（S.A.P.）へと立ちかえらなければならなかった。

早春の輝かしい勝利の余勢をかって、わが軍と人民は敵に対する攻撃を急速に推し進め、一九六八年五月と六月の初めに、総攻撃と広汎な蜂起の促進によって、多くのさらにより大きな勝利をかちとつ

た。これに加えて、一九六八年八月と九月に敵に繰り返し打撃を与えたあと、われわれはエイブラムズ將軍の、考え出されたばかりの「平定」戦略を失敗に帰せしめ、アメリカとそのかいらいどもを、これまで以上に危機的な情況に追い込んだ。

一九六八年総攻撃と広汎な反乱によるわが軍と人民の未曾有の大きな全般的な勝利は、まぎれもなく軍事、政治、外交のすべての分野におけるわれわれの攻勢戦略の必然的發展の結果であった。悪質なやぐざ者アメリカ帝国主義の侵略者どもは、ひどく震えあがったであろう。アメリカの支配層は、共和党と同様民主党においてもほとんど例外なく、この高くつく侵略戦争から抜け出したがっている。あらゆる側面からの圧力のもとで、彼らはわが国の北部に対する爆撃を無条件に停止せざるを得なかった。彼らは会談のテーブルに着かざるを得なかった。そして現在撤退を考えている。一方では彼らは南ベトナムにおけるその新植民地主義政策を維持する方途を捜し続けている。

完全な勝利に近づけば近づくほど、わが軍と人民の戦闘は激しくなるであろう。しかし情勢全体はますますわれわれに有利になってきている。わが軍と人民の攻勢と蜂起の炎は、三つの地域の全戦線で燃えさかっている。アメリカの侵略者どもとその取り巻きどもは、なおたいへん頑強ではあるが、「薬で火を消す」ことはできない。北ベトナムの千七百万の兄弟たちからの熱誠な援助を享受している千四百万のわが南ベトナム人民の燃える炎は、必ずやアメリカの侵略者どもとその取り巻きどもを黒焦げにするまでなお高く燃えさかるであろう。

あまたの試練をふまえ、われわれの革命闘争の現実には、われわれの攻勢戦略がまったく正しいことを示してきた。この戦略は南ベトナム革命を着実に一歩ずつ前進させ、もっと大きな、より栄えある勝利をかちとることを可能にした。この戦略はわが人民の熱烈な愛国主義と敵に対する深い憎しみから生まれる。戦いそして勝利するという決意と、「独立と平和にまさるものはない」という立場は、千四百万

の南ベトナム人民の徹底的な革命精神のあらわれである。それは南と北の間の血で刻印された関係と三千百万のベトナム人民全体の統一の固いきずなのあらわれである。

われわれの攻勢戦略は、客観的な情勢分析とベトナムの実践的条件への革命的理論の科学的、創造的適用にその基礎を置いている。

この記事の第二の部分で、筆者は、一九六八年の攻勢の指導についての六つの経験を引き出した。それらを次に列挙すると、

一 きわめて複雑な状態にある敵とわれわれ自身とを正しく評価することは、戦略を決定するに当たって必要条件である。

二 大衆がたえまなく決起し、攻勢的立場を発展させるのに好都合な諸条件を創造するために、軍事的攻撃は、政治闘争と敵の軍隊の中での煽動工作と緊密に結びついたものでなければならぬ。

三 三つの戦略地域のすべてにおける全戦場において同時攻撃を行なうこと。

四 三軍を緊密に結合し、軍のさまざまな部門と業務を整合させ、あらゆる戦闘方法を柔軟に適用し、大、小、中の攻撃を整合させ、たえまなく戦い、敵に休みを与えないこと。

五 敵の生命力の絶滅と敵の神経組織への攻撃を緊密に整合させ、残虐な敵の手先どもの絶滅と、敵の支配の破壊と敵の戦争手段の破壊とを整合させること。

六 戦闘を続行しながら、より迅速な成長とより大きな勝利を確保するために、戦闘と建設とを整合させること。

筆者は次のように結論する。

過去一四年間にわたる栄えある戦い、とくに南ベトナム解放民族戦線の指導のもとでの最近の八年間のそれをふり返ってみると、南ベトナムの軍と人民は、さらに、より栄えある勝利をかちとろうと思えば、革命の路線と指導を創造的に適用しつつ無敵の

攻勢戦略を堅持することが、それだけですすます結論づけられる。

わが人民の一九六八年における大地をゆるがす総攻撃と広汎な蜂起は、その攻勢戦略が大きく発展したものであり、革命的な路線と指導の、まさに誤りのない適用の必然的な結果であり、戦争を指導する

に当たったのわれわれの戦術の非常な成功である。われわれの血の代価によって学ばれたこれらのきわめて貴重な経験は、もし賢明に発展させられ、適用されるならば、必ずわが軍と人民が、さらにより速く前進し、より大きく、何度もの勝利をかちとるのを助けることになるであろう。

〈資料2〉

ネオ・ラオ・ハクサット(ラオス愛国戦線)の政治綱領

(一九六八年一〇月三十一日に開催された臨時大会にて満場一致で採択)

フランス植民地主義者とアメリカ干渉主義者にたいする勝利的抵抗ののち、多民族ラオスの人民は、主権・統一・独立・領土保全の承認を勝ちとった。これは、われわれの祖国ならびに自由で幸福な生活を建設しようとしている人民にとって、きわめて輝かしい前途の展望を開く巨大な歴史的意義をもつ勝

利である。

しかしながら、ジュネーブ協定の調印とフランス植民地主義者の支配ののちただちに、アメリカ帝国主義者はわれわれの国に干渉と侵略を開始した。これらの陰謀は、ラオスをかれらの植民地に変え、軍事基地に変えることであつたし、今なおそうである。この展望を成し遂げるために、かれらはいかに買収し、かれらの支持者をえ、ビエンチャン軍

および政権という従順な道具をでっちあげた。それと同時に、かれらはタイ軍事集団の協力をえて、われわれの国にたいする「特殊戦争」と新植民地計画と侵略を遂行するためのスプリングボードとしての軍事基地をタイに建設した。過去一四年余にわたって、かれらは経済・軍事「援助」を媒介として、ラオスに深く干渉し、ビエンチャン支配地区を新植民地に変えた。その間、かれらは、われわれの国にたいする侵略戦争を遂行するために、またかつて以上の極悪、野蛮な方法でわれわれの人民の救国闘争を抑圧するために、「顧問」と武器を持ち込み、その

た。かれらは、かいらいたちに愛国的中立軍やその他の愛国的な人びとの代表者の参加する民族統一政府の存続を挫折させることをそかのかし、講和と民族統一の政策の実施を破壊することをそそのかし、ネオ・ラオ・ハクサットが擁護している平和と独立と中立の障害となることをそそのかした。

かいらいに徴兵を促進することを強制し、いわゆる「国民軍」を強化している。最近かれらは、かれらの直接支配のもとにおかれた部隊、「特殊部隊」を作り、そして凶暴な爆撃・掃射作戦を行なう空軍力でもって、われわれの同国人のなかに数限りない死や悲しみを生みだしている。かれらは一九五四年と一九六二年のラオスに関するジュネーブ協定ならびにこの国の政党が到達した協定を破り、踏みにじっ

ビエンチャン支配地区において、アメリカ帝国主義者は、かれらのかいらいがかつて以上の悪質かつ大規模な方法で一連の反民族的・反人民的政策を仕上げるよう駆りたてた。民主主義的な自由は踏みにじられ、愛国者は弾圧され、迫害され、秩序と安全は保証されず、商業投資のすべての権利はひとにぎりの支配者の為に集中されている。生産は衰え、⁽¹⁾「キップ」の価値は引き下げられ、人民の生活水準は悪化した。墮落した文化が奨励され、若者の多くの部分がそこなわれた。仏教はいちじるしく凌辱され、聖塔は多くのところでアメリカ流の生活のため商業活動や宣伝のセンターに変えられた。すばらしい風習や良い伝統といった文化的遺産は愚弄され

た。混沌と墮落が社会に横行し、窃盜、無頼、アルコール中毒、アヘン常習、賭博、開富くじ、売淫がはびこっている。

あきらかに、狡猾にラオスを侵略したアメリカ帝国主義者は、多民族ラオスの人民のもっとも危険な敵である。身代を築くために国を売りわたし、意識的に祖国と同胞を裏切ったかれらの忠実な部下、ピエンチャンの支配者たちもまたわれわれの敵である。

平和と独立と自由に深い関心をもつわれわれの人民は、自分たちを決してふたたび奴隸状態にひきずり込まれたままにしておかないであろう。

一九五六年の初め、ネオ・ラオ・ハクサットは、われわれの人民と世界にその政治目的——平和・独立・中立・民主・統一・繁栄のラオスの建設——をおごそかに宣言した。この目的は、祖国の最高の利害と各階層の深い願望に完全に従っている。それゆえ、それはわれわれのすべての人民の歓迎と世界世論の同感と支持を受けた。

をもって、かれらのかいらい部隊を確立強化し、熱病のように「メコン防衛線」を確立し、タイ軍事集団に頼ることに全力を傾けている。

たしかに、われわれの人民は偉大な勝利を得たが、しかしアメリカ帝国主義者とかれらのかいらいの前述の策動によって、われわれの祖国と人民は緊迫した情勢に直面させられている。

それゆえ、民族や宗教や政治的信条を問わず、次のことがわれわれの人民の直接緊急、かつ神聖な任務となる。

すなわち、「平和・独立・中立・民主・統一・繁栄のラオスを建設し、インドシナと東南アジアと世界の平和を回復し、守ることに貢献するために、アメリカの『特殊戦争』および新植民地主義をくじき、裏切り者とアメリカのかいらいを打倒するため統一して闘争すること」がそれである。

ネオ・ラオ・ハクサットは、これまでかかげてきた救国と国家建設の政治路線にもとづき、現在の情勢の展開を考慮に入れ、前述の政治目的の立場で、

最近一四年にわたって、ラオス人民は、アメリカ帝国主義者ならびにかれらのかいらいたちにたいする闘争において、多くの偉大な勝利をおさめた。領土の三分の二、人口の半数は解放された。愛国勢力は絶えず成長した。解放区において、上述の政治目的は首尾よく実現された。すなわち、経済と文化が次第に発展し、さまざまな民族の団結は日々強まり、秩序と安全、人民の資質と道徳的生活が絶えずなく改善された。その結果、ネオ・ラオ・ハクサットの影響と威信は国内においてもまた世界においても高まりつつある。

われわれの人民の勇敢で粘り強い闘争は、アメリカ帝国主義者とそのかいらいに多くの軍事的・政治的後退をもたらした。にもかかわらず、敵は侵略と背信の陰謀に頑強に固執している。現在、アメリカ帝国主義者は、南ベトナムでの切迫した完全な失敗とわれわれの国での重大な敗北に直面して、われわれの国にたいする侵略戦争を長びかせ、インドシナおよび東南アジアの緊張を永続化しようとする望み

以下の政策を仕上げた。

第一項

全人民の統一を強化し、民族統一戦線を強化・拡大することに努め、アメリカ帝国主義者による侵略を打ち破るために、また裏切り者とかれらの従者を打ち破るために全民族勢力を能動的に動員する。

すべての社会階層、民族、宗教団体、政党、大衆組織、平和と民主主義をあくまで支持し、平和・独立・中立・民主・統一・繁栄のラオスを建設することに賛成するすべての愛国勢力と人民を広範に統一する。

王権を尊重する。

ネオ・ラオ・ハクサットと愛国的中立勢力との戦闘的同盟を拡大・強化する。

自由と民主主義と正義のためのアメリカの侵略にたいする闘争に賛成するすべての勢力と要素——知識人・学生、軍ならびに警察の将校と兵隊、ピエン

チャン政権の民間および軍幹部職員——を歓迎し援助する。

アメリカ帝国主義者ならびにそのかいらいにたいして闘争するためにアメリカとそのかいらいに支配された組織を離脱して、ネオ・ラオ・ハクサットないし愛国的中立勢力に結集したり、あるいはそれらいずれかの勢力とともに共同行動をひきうけるあらゆる勢力および要素と理解ある精神と平等な立場で協力する用意がある。

第二項

アメリカの侵略に団結して抵抗し、国を救い、あらゆる人びとの平和な生活を建設するための、あらゆる分野において平等を達成し、さまざまな民族間の連帯と相互援助を達成する。

帝国主義者とそのかいらいによって育成されたすべての憎悪、権利の侵害、軽蔑、矛盾を取りのぞき、さまざまな民族間の間隙をふさぐ。あらゆる分

野での権利と義務において、すべての民族は平等であり、特に、救国のためアメリカ帝国主義者およびそのかいらいにたいして闘争し、そしてわれわれの統一された国を發展させ、建設するためすべての人びとが互いに援助しあうために、かれらは、団結を達成する義務を負わされている。

すべての民族、とりわけ少数民族を、経済的發展と教育とにおいて、積極的に助け、かれらの資質と道徳的生活を改善し、かれらの健全な芸術と文学を保護することはもとより、すばらしい伝統と風習をも保護する。人口の増加にかれらが寄与するため、すべての民族を援助し、特に民族の維持を援助する。

積極的に少数民族から多くの幹部と知識層を養成し、それによってすべての民族のために、国の公共事業の運営を發展させ、それに参加するための好都合な条件を造る。

第三項

人民のために十分な民主主義的権利と自由を確立し、かれが国の主人として、また自分自身の運命の主人としてかれらの役割を次第に果しはじめるために便宜を図る。

すべてのラオス市民のために男女の選挙権および被選挙権、結社の自由、集会の自由、デモンストレーションの自由、演説の自由、出版および言論の自由、信仰の自由を確立する。すべてのラオス市民のために、身体の不可侵、個人の所有権、現財産、信書の秘密、運動の自由、仕事の自由、居住の自由を確立する。

アメリカ帝国主義者のかいらいの、住民を逮捕し、投獄し、略奪することを目的とするあらゆる政策に反対し、なかでも愛国者にたいする差別、報復、弾圧に反対し、いわゆる「難民センター、集合村、發展地域」等に住民を収用する政策に反対し、アメリカ帝国主義者の侵略の陰謀に奉仕し、かいらいの私的利益を保護し、人民の財産や資源を横奪するため、人民に武装を強制する政策に反対する。すべて

仏教を尊重し、保護し、すべての宗教団体を統一して、もって民族統一の実現に寄与し、救国のため、アメリカ帝国主義者にたいする闘争に関心を払う全民族的勢力の増進に寄与する。アメリカ帝国主義者とそのかいらいによる仏教を支配するあらゆる策動に反対し、特に、かれらの仏教原理の歪曲、かれらの犯罪的陰謀に奉仕することや強いる僧侶にたいする支配、墮落文化の伝播のためのセンチターに変えた聖塔の神聖を犯す行為、仏教宗派間の分断活動に反対する。アメリカ帝国主義者とそのかいらいの宗教団体を分裂させる策動に反対する。

仏教を尊重し、僧侶の清浄とかれらの立場と職務遂行の自由を保障し、聖塔を守り、僧侶およびすべての仏教宗派の学徒間の団結と相互援助を助成する。他の宗教の祭司ならびに信者の連帯を助成する。

第四項

の「難民センター」およびすべての統制形態の廃止を要求し、人民の利害に反する「集合村」や「発展地域」等に住む住民の自由の制限の廃止を要求する。拘留されている愛国者たちの釈放を要求する。

第五項

救国と国家建設のために、男女の平等を達成し、アメリカの侵略にたいする闘争におけるすべての活動分野で婦人の役割を高め能力を育成する。

政治的・経済的・文化的・社会的分野での男女の平等を達成する。救国と国家建設のためのあらゆる活動に貢献する婦人を支持し、積極的に援助する。婦人の健康に最大の注意をはらい、妊婦と母親および子供を保護する。

婦人にたいする蔑視と圧迫のすべての行為をなくし、あらゆる方法で彼女らの文化的・政治的教育とさらに職業的訓練において、彼女らを積極的に援助し、このようにして祖国と国家建設のためにアメリカ

カの侵略者との闘争における価値ある部署を彼女らに与える。

第六項

国家主権を守り、人民の利害に奉仕する民族統一の民主的政権を確立する。

アメリカ帝国主義者とそのかいらいたちの新植民地主義的侵略政策の道具として使用されているピエンチャン行政機関にたいする支配に反対する。

われわれ多民族人民の利益と独立と主権あるラオスの正当な代表として民族連合民主政府を設立する。そして平和、独立、中立、民主、統一、繁栄の路線に沿って国家建設の政策を実行する。

村および共同体(タッセン)水準から民主主義的手続きに沿って行政機関を選出する。誠実に祖国と人民の利害を守るために、人民に奉仕する真の愛国者を各級行政機関に選出・指名する。

普通選挙によって、一九五七年の改正された選挙法に従って、われわれ多数民族の人民の各階層の利

益を代表する議会を選出する。

通常の方法で、祖国と人民を愛する各級、各種行政要員をつくり出し、責任感を浸透させ、必要な資格を身につけるのを援助する。収賄と汚職、権力の乱用、不当な圧迫と搾取を抑制し、排除する。

第七項

人民のために、国家の防衛と秩序と安全を確保することのできる真に愛国的な人民武装勢力と保安部隊を設立する。

アメリカ帝国主義者とそのかいらいによる資金を支払われてわれわれの国にたいする侵略の道具に変えられたピエンチャンの武装勢力と警察にたいする支配に反対する。動乱をつくりだし、われわれの人民から略奪する山賊的戦闘部隊(「特殊部隊」)の編成に反対する。

大きな戦闘の可能性をもち、国家防衛と救国の任務をはたすことのできる正規軍、地方軍、民兵、ゲリラ、祖国に完全に奉仕する民警を含む、愛国的武

装勢力を建設する。

通常の方法で、祖国と人民を愛する武装勢力と警察の幹部と戦闘員をつくりだし、かれらに人民にたいする責任感を浸透させる。幹部と戦闘員の技術的・戦術的訓練をかれらの教育やかれらの資質や道徳的生活の条件を親密に見守り、負傷し、不具になった戦闘員を保護し、祖国のために生命をなげうったかれらの家族を援助する。

第八項

民族的・主権的経済と財政を建設し、発展させ、人びとの生活水準を向上させ、一步一步繁栄した国家を建設する。

アメリカ帝国主義者による干渉と制限と強制のあらゆる形態を撤廃し、アメリカに追従する支配集団による独占と経済的搾取のあらゆる形態を打破し、コウアンやラム制度(封建的搾取の形態)のような土地や山林や河川を私有する制度を禁止し、地代・水牛代・利率引下げのために運動する。

産業、農業、林業、商業、交通と貿易、財貨と通貨からなる民族的・主権的・繁榮的経済と財政を、われわれの資源と人民の「自力更生」の精神を基礎に達成し、同時にわれわれの人民の生活水準を改善し、国家の建設に必要なものを満すために政治的條件のつかない外国の援助を求める。

しっかりとした方法で農業と林業を發展させる。国家は農業治水の發展、完全な耕作、牧畜業の手段を確立し、それらをもって人民を援助するであろうし、森林資源を開発し、森林を保護し、山岳地域の少数民族が農業生産の發展と安定のためにより好都合な地域に定住するのを援助する。

国営企業を確立し、私営および公私合営の企業を助成することによって、産業を建設發展させ、手工業を再建拡大する。

国内取引と同時に外国貿易を發展させる。国家は商品の循環と流通を系統化し、個人商人を、特にかれらの遠隔地への活動の拡大を助成・援助し、同時に適切な関税政策を適用し、外国貿易を系統化する。

るであろう。

安定した経済と財政と独立の通貨を設立する。正しく公正な税金政策および厳正な節約実施政策を励行し、生産を育成し、国家予算の正しい運用を確立し、人民の生活条件の安定に寄与する。

通信と運輸を国中いたるところで發展させ、特に山岳地域の道路建設、運輸手段を確立する。国家は、住民の移動を保障するための、また経済的・文化的活動を育成するための運輸を開発する個人事業に出資し、助成するであろう。

第九項

民族的・進歩的文化と教育を發展させ、人民の文化的・科学的水準を高め、医療奉仕を發展させ、人民の健康を向上させる。

アメリカ新植民地主義者の政策に奉仕するため、墮落したにせもの文化と害毒を流す教育と闘う。

人民のなから文盲を次第に根絶するために文字

学習の猛運動を推進する。初等・中等学校を再建し、強力に發展させる。職業学校を開設し、發展させ、民族的進歩的内容にふさわしい素材と教育過程をもったより高度な教育の学科を一步一歩創設し各級・各科の教育の手段としてラオス語を使用する。ひとたび帰国すれば祖国に奉仕できるよい要素となるために外国で学んでいる学生のために適切な指導を留意する。

民族的・進歩的内容にふさわしい文学と芸術を育成し、すばらしいラオスの風習とすべての民族の伝統と歴史的記念碑を保存する。新しい生活のためのキャンペーンを行なう。諸民族がかれらの文字を工夫することを助け、同時に積極的かつ広範にラオス国語を普及する。インテリ、芸術家、作家がかれらの才能や能力を祖国と人民にささげるために發展させることを助ける。

医療幹部を訓練し養成する。同時に遠隔地に病院や薬局や産院のネットワークを建設する。

予防衛生、流行病予防、医学的訓練、スポーツの

猛運動の發展のためキャンペーンを行ない、同時にマラリヤ、梅毒、らい病といった危険な病氣とたたかい、人類の維持と人口の増加の観点から、幼児の死亡率とたたかう。

第一〇項

人民の権利と利益を保証し、かれらの生活条件を配慮し、事故や災害の被害者を援助し、正義と社会的進歩を高める。

各民族の農民が耕す土地（水田と「レイ」）を持ち、土地の少ないまたは土地のない農民が農具を供給される手はずをととのえ、すべての農民が生産を増し、かれらの文化的、物質的生活条件を向上させるのに援助を与えられる手はずをととのえる。

都市の労働者と勤労者に仕事を保証する。特に労働者の利益にたつて、労働法を制定し、社会保障制度を適用し、まずなによりも八時間労働と週六日制にもとづく公正な賃金体系を確立する。

救国と国家建設のための闘争において男女青年の

役割と地位を高める。仕事の履行と祖国と人民への奉仕にそのすべての能力をふりむけることができるようなあらゆる面でその権利と利益を保証することに大きな注意を払う。

幹部職員、カードル、国营および私営企業の従業員のために、適切な仕事を用意し、絶えずかれらの文化的・専門的水準を高め、かれらのために公平な賃金体系を確立する。

復員将校ならびに兵士に生計のための仕事を供給する。

いまだいくらかの地域に発生する飢きんを撃退する。すべての民族間の相互援助を発展させる。同時に、国家は自然災害、飢きんによる被災者、そしてとりわけ戦争の被害者を救済する活動を組織するであらう。

社会的病の被害者の面倒を見る用意をし、かれらにたいする十分な予防手段をとる用意をする。墮落文化によって毒された人びとが生計の資をもち、かれらの誤りを直し、国家建設に寄与するために再教育する。

育し、援助する。

第一項

広範なラオス諸民族の利益を保証し、ラオスに在る外国人の正統な利益を保証する。広範なラオス国民を屈辱と圧政から守り、不当な財産没収からかれらの所有権を守る。

ラオスの主権を尊重する外国人居住者は、丁重に扱われ、かれらの正統な利益を保護されるという利益をうけ、困難な状態の場合援助をうけ、われわれの人民との友好協定の締結におけるかれらの価値ある役割のために、またかれらのラオスの防衛と建設への貢献のために祝福される。

第二項

平和と中立の外国政策を遂行し、平和と正義を愛する世界中の人民および政府と連帯と友好的結びつきを設立する。

われわれの国におけるアメリカ帝国主義とその他

の侵略勢力のすべての形態での干渉と侵略のあらゆる陰謀をくじく。

ラオスの主権、独立、統一、領土保全を守ることとを目的とする独立の外国政策を実施する。

平和と友好に生き、独立、主権、領土保全を尊重するすべての国と外交関係を樹立する。

救国、独立の保護、国家主権、国家建設のためにアメリカ帝国主義の侵略者にたいする共通の闘争においてベトナムおよびクメール両国と平等な立場での連帯と友好と長期の協力を強化する。

政治的条件を付けられることなく、あらゆる国から政治的・社会的体制を問わず平等の原則と相互信頼のもとに援助を受け入れる。

ラオスに関する一九五七年および一九六二年のジュネーブ協定とラオスの利益を害しない他の国と調印されたあらゆる条約および協定を守り、厳正にそれを履行する。ラオスの利益をそこなうすべての条項を破棄する。

いかなる軍事同盟も結ばない。ラオス領土にいか

なる外国の軍事基地を設立することも許さないし、他の国にたいする侵略のためにそれを使用することも許さない。侵略のためのいかなる軍事同盟の保証も認めない。

世界のすべての平和を愛する人民との連帯と友好を強化する。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国の民族解放闘争と平和、民主主義、社会発展のためのあらゆる人民の闘争を支持する。

右に挙げた政治目的と一二項の主要な政策は、祖国の利益を保証し、ラオスのあらゆる社会階層と民族の熱望を満たしている。

ネオ・ラオ・ハクサットは、すべての公務にある幹部職員、カードル、職員、軍隊、われわれの多民族の全階層とすべての平和を愛する愛国者にたいし、さらに連帯を強化し、断固として闘争を強化することを訴え、アメリカ帝国主義者がわれわれの国での干渉と侵略の行為をやめ、ラオスからかれらのすべての顧問と軍人、すべての武器と戦争物資を撤

退することを要求し、ラオス人民が平和に生き、平和・独立・中立・民主・統一・繁栄の路線に沿ってかれらの国を建設することを訴える。

アメリカ帝国主義者が侵略の意図を棄てず、そのかいらいが祖国を裏切ることに関執する限りは、かれら両者がラオスの平和・独立・民主・統一を破壊し、右の目標と政策の実現を妨害する限りは、われわれはかれらのすべての腹黒い陰謀を粉砕し、最後の勝利をおさめるため解放区をより強力な根拠地へと建設強化するために、われわれの民族の連帯のブロックを強化する。

ネオ・ラオ・ハクサットは、全世界の平和と正義を愛する人民と政府にたいして、ラオス人民の正義の闘争にたいする積極的な支持を与え、ラオスにおけるアメリカ帝国主義者の干渉と侵略のすべての行為を終結させるために適切な処置をとり、それによってラオス人民が自からの問題を自ら解決せしめるよう訴える。

世界の平和と正義を愛する人民の同情と積極的な

支持を受けているラオス人民の正義の闘争は必ずや勝利するであろう！

ネオ・ラオ・ハクサットの政治綱領は必ず実現されるであろう！

救国と平和・独立・中立・民主・統一・繁栄のラオス建設のために、ラオス人民は統一して、アメリカの侵略と断固戦おう！

(1) ラオスの通貨。一キップは一五円。

〈資料3〉

カンボジア統一抵抗人民運動(クメール・ルージュ)の声明

——インドシナ人民首脳会議共同声明にたいして——

(一九七〇・五・一)

〔解説〕 ジュネーブ協定(一九五四年)後、

カンボジア領よりベトナムのベトナム人部分が撤退した。その後のシアヌーク時代、幻の反政府ゲリラといわれていたクメール・ルージュは昨年三月一八日のロン・ノル一派のクーデター以来、シアヌークを反米・民族解放闘争の側に引きつけ、カンブチア民族統一戦線を結成した。そしてインドシナ三国首脳会議が開催されたのち、またクラチエ、モンドルキリの二省都を解放し、パタンバン省など二三省の大部分に解放区を作るにいたってはじめて、国際的にその指導者たちおよびその政治綱領の一部を発表したのであった。

ここに掲載する「声明」はクメール・ルージュの正式名称である「カンボジア統一抵抗人民運動」の代表であり、現在国内において、シアヌークの王国民族連政合府の副首相兼国防相、農林相、情報相であるキュー・サムフォン、フリー・ユオン、フリー・ニム三氏によってなされたものであり、クメール・ルージュの公表された文書としては最初のものである。

カンボジア民族統一戦線情報局の発表にもとづくベトナム通信の報道によると、カンブチア民族統一戦線指導下のカンボジア統一抵抗人民運動のキュー・サムファン、フリー・ユオン、フ

1・ニムの三代表は、さる五月一日声明を発表した。その全文はつぎのとおり。

インドシナ人民首脳会議は四月二四日から二五日にかけてひらかれ、四月二七日に共同声明を発表した。

これはいま共同の敵アメリカ帝国主義者およびその手先を一掃するため、団結して戦っているカンボジア人民、ベトナム人民、ラオス人民にとって、歴史的意義をもつ、きわめて重要で、ひじょうに大きな成果である。

われわれカンボジア人民にとっていえば、インドシナ人民首脳会議の輝かしい成果によって、われわれはわが国人民の戦闘的団結の力にたいする確信を深め、闘争のほこさを共同の敵アメリカ帝国主義者とその手先にむけるインドシナ諸国人民の戦闘的団結の大きな力にたいする確信を深めた。

カンボジア人民は、社会主義諸国、および平

和と正義を愛好する全世界の国々にの人民の声援と熱烈な支持にたいして、いっそう確信にみちあふれている。

インドシナ人民首脳会議の共同声明の輝かしい光に照らされて、カンボジア人民、ベトナム人民、ラオス人民は、一九五四年のインドシナ問題にかんするジュネーブ協定と一九六二年のラオス問題にかんするジュネーブ協定を基礎として、また平和共存五原則を基礎として、三国人民のあいだの相互信頼、独立、主権、領土保全の相互尊重をいちだんと強化するであろう。

共同声明は、三国人民のあいだの相互内政不干渉、心からの相互支援を強調している。共同声明はつぎのようになる。各国は、現在戦闘をおこなっているばあいでも、将来国家建設をすすめるばあいでも、主として独立、自主、自力更生の立場から出発する。相互支援は必要ではあるが、それは自由意思、平等、相互利益を基礎としなければならない。また、友好

的な交渉、平和、相互理解の精神にもとづいて、ともに関心をよせている問題を解決しなければならぬ、と。

インドシナ人民首脳会議の共同声明の内容は、カンボジア人民の願いと基本的利益にまったく合致している。それは、わが国人民が国家元首ノロドム・シアヌーク殿下を議長とするカンブチア民族統一戦線のなかで、一致団結し、勇敢に戦うことによって、アメリカ帝国主義者とロン・ノルシリック・マタク反動集団の干渉、侵略、破壊活動を粉碎し、独立、平和、中立、主権、領土保全をまもり、人民に真の自由と民主の権利を獲得させ、最終的に独立、民主、繁栄、強大なカンボジアをうち立てよう励ましている。

ちょうどこの会議の共同声明が発表されたのち、好戦的な元凶、「アジア人をアジア人とたたかわせる」「インドシナ人をインドシナ人とたたかわせる」主義の創始者、ニクソン大統領

は、一九七〇年四月三〇日、ロン・ノルシリック・マタク集団への兵器供与を公表し、アメリカの軍隊とそのサイゴンの手先の軍隊に、わがカンボジアの領土にたいして空中、地上からおおびらな侵略をおこない、国境地帯でわが国人民を虐殺し、人民の愛国闘争を弾圧する命令を公然と発して、崩壊寸前のロン・ノルシリック・マタク反動集団を救い、戦争を全インドシナに拡大しようとしたのである。

このことは、インドシナ人民首脳会議の共同声明のすぐれた見とおしとその重大な意義を、いっそうはっきりと示している。インドシナ三国人民は、この共同声明を積極的に実行すべきである。

われわれは、ノロドム・シアヌーク殿下を議長とするカンブチア民族統一戦線指導下のカンボジア統一抵抗人民運動の代表の名において、また、われわれ個人の名において、インドシナ人民首脳会議の共同声明を全面的に、断固とし

て支持するとともに、アメリカ帝国主義者とその手先のあらゆる干渉と侵略行動を激しく糾弾することを、おごそかに宣言する。

これまでにおさめた勝利の成果をまもり、より多くのより大きな勝利をかちとり、今回の会議の成果をのばし、アメリカ帝国主義者とロン・ノルシリック・マタク反動集団のあらゆる干渉、侵略、破壊活動を適時に失敗させるため、われわれはカンボジア統一抵抗人民運動の代表の名において、われわれの全同胞、カンブチア民族統一戦線の各級委員会、各部門の幹部、人民解放武装部隊、ゲリラ、地方部隊にたいし、カンブチア民族統一戦線各級委員会のまわりにかたく結集して、つぎにのべる具体的任務を完遂するよう呼びかけるものである。

一、指導を強化し、人民武装闘争と政治闘争の展開に拍車をかけて、アメリカ帝国主義者のあらゆる干渉、侵略、破壊陰謀をうち破り、村、郷、郡、省にわたる各級人民政権をうち立

て、人民の生活の安全と民主・自由の権利を保障すること。

二、宣伝、訓練、組織活動にいっそう力をいれ、大衆の力を組織して強固な革命組織をつくりあげ、人民の団結を強化し、各戦線で戦闘をくりひろげ、人民を動員して精神と物質の面で相互支援をおこなわせること。

三、量と質の面で、ゲリラと民兵、それに地方部隊、主力部隊をふくめた三種の武装勢力の建設を強化して、十分な力量をもって敵をせん滅し、解放区を拡大し、人民の生命と財産をまもること。

四、生産を發展させ、保護する運動、および各人の能力にもとづく自由意志による前線支援節約運動をくりひろげることにいっそう力をいれること。

五、インドシナ人民首脳会議の共同声明の精神にもとづいて、平和と正義を愛好する全世界の国ぐにと団体、とりわけいま、われわれと

もに共同の敵アメリカ帝国主義者およびその手先と戦い、かれらに抵抗している兄弟のベトナム人民、ラオス人民との戦闘的団結を強化すること。

六、われわれは、すべての僧侶、知識人、学生、教授、愛国的職員、および敵が一時的に支配している地区で生活している全同胞にたいし、団結し、熱情をこめて愛国組織に参加し、全国の軍民とともにロン・ノルシリック・マタク反動政権をくつがえし、新しい、真の独立、自由、民主のカンボジアをうち立てるよう呼びかける。

前進しよう、同胞のみなさん、幹部のみなさん

〈資料4〉

タイ共産党一〇項目綱領

わが国における現在の状況に対処するため、タイ共産党は、われわれのすべての同胞にたいして、こ

ん、戦士のみなさん！ あらゆる困難と犠牲をおそれず、手中の銃をしっかりとにぎりしめ、全国各地で断固として敵に打撃をくわえ、解放区を拡大し、後方を強固にして、われわれの愛する祖国のために勝利をたたかいたろう。

真の独立、自由、民主をめざし団結して戦うわが国人民の偉大な運動は、たとえ長期のなみなみならぬ闘争を経なければならぬとしても、最後に輝かしい勝利をかちとるのである。

アメリカ帝国主義者とロン・ノルシリック・マタク反動集団は、かならず失敗し、滅亡するにちがいない。

ここに党の当面の政策を公表する。

一 断固として人民戦争を戦い抜き、アメリカ帝国主義をタイから追い出し、タイ人民と国に破滅をもたらすファシスト独裁、裏切り政権タノム一味を打倒すること。労働者階級・農民・小ブル・民族的ブルジョア、愛国者および民主主義者の代表で構成され、真に独立した民主的な政策を実行する人民の政府をうちたてること。

二 人民や国にとって有害となるすべての法律、通告、命令および規則を撤廃すること。

人民には言論の自由、執筆、出版、集会および結社の自由、集団示威の自由、雇用の保障、宗教の自由が与えられ、各自の慣習および生活の保障にたいする権利が与えられる。これらの権利は人民と国に害を及ぼすものではない。

三 アメリカ帝国主義者、タノム一味、反革命分子と暴君的な地主たちのすべての財産と土地を没収し、これらの財産と土地を人民と国の利益のために

配分すること。人民にたいして悪業をほしのままにしてきた反革命分子や反動分子たちを彼らの犯罪の悪質程度によって断固として罰すること。悪事を働いた者でもこれを認め改悛の情を示す者には、生活を一新する機会が与えられるであろう。

四 すべての裏切りのかつ不当な協定および条約を破棄すること。タイの人民革命を支持するすべての国と団結すること。世界の革命的人民とともに、帝国主義、現代修正主義ならびにあらゆる反動勢力に反対すること。全世界の被抑圧人民と国家の正義の闘いを支持すること。平等および主権と領土保全の相互尊重の上になつて諸国間との友好関係を促進すること。

五 タイに居住する各民族はその一大家族の中において各民族の自治権を享有する。各民族は、平等の権利を有し、お互いに尊重しあい、相互支持と援助を与えるであろう。人民に無害である宗教、言語、文化ならびに慣習は尊重されるであろう。民族的弾圧と人種差別に反対すること。経済、文化、教

育および公衆衛生はすべての民族の居住する地域においてあまねく実施されるであろう。

六 封建的な搾取制度を徐々に廃止していくこと。家賃と利子を値下げすること。すべての不当な負債の全廃。農民が生計をたていくための土地を与えられるために、各地域の情況に見合った農地改革が推進されるであろう。灌漑を起し、農作物を改良し、生活水準を高めて農民の革命運動における十分な役割を發揮させること。

七 国営産業および貿易企業を促進、發展させること。国家経済に不利益とならない民間産業および貿易企業を保護すること。依然として人民に利益を与えている手工業者および小規模の貿易企業に援助を与えること。

八 労働者の雇用、賃金および安全を保障すること。同じ程度の生産性をあげて、同種類の仕事についている労働者は、性別、年齢および民族の違いに関係なく同一賃金を支払われるであろう。革命運動の中で労働者階級の役割を十分に發揮すること。

九 婦人は、政治、経済、文化、教育および職業の分野において男性と同等の権利をもつてであろう。革命運動および生産において婦人の役割を十分發揮すること。婦女子にたいする十分な厚生任務を約束すること。青年にたいして教育と仕事を保証すること。青年が母国を愛し、民主主義、人民と労働を愛し、積極的に革命に参加し、共同体のために犠牲精神を發揮するよう彼らを育成すること。

一〇 反動分子と腐りきつたアメリカ帝国主義者を一掃し、人民の精神を毒する、封建的文化を排除すること。革命的文化を促進・發展させること。タイおよび他の諸国の民族的な文化遺産を一定の批判をもって継承すること。愛国的、民主的、科学的かつ大衆性をもつた教育を推進すること。とりわけ、全国的にわたつて公衆衛生を普及・促進させること。

共産党の声明は続けて次のように述べている。「わが党の当面の方針は、全国住民のさし迫つた要

求および今日の彼らの闘争における共通の目標を代表している。この方針のもとに、わが党は独立と民主主義をめざす闘いを貫徹するにあたって、すべての愛国的ならびに民主主義を擁護する勢力と協力していく用意がある。今日ここに党綱領を発表すること

とは、敵にたいする断固たる闘いに愛国的・民主諸勢力を結集させ、革命の勝利へむけて一層有利な方向へわが国の状況を進展させていくことになるであろう。」

〔北京周报〕一九六九年一月一七日号

〈資料5〉

マラヤ民族解放同盟宣言（一九六五・三・一五）

〔解説〕 マラヤ解放同盟はマラヤ共産党の統一戦線組織であり、国外には北京とジャカルタに代表部を置いていたが、ジャカルタではインドネシア九・三〇事件後、マレーシア政権と和解したスハルト政権によって弾圧された。オプイスは閉鎖させられ、代表たちは逮捕され、のちハノイに亡命した。マラヤ共産党は、マレーシアをイギリス帝国主義の新植民地主義の産物として認めていない。すなわちサラワク、サ

バの部分では北カリマンタン民族解放運動を支持し、独立すべきだとし、シンガポールの場合には「マラヤ連邦」の一構成部分であるとして、「独立」をみとめていない。したがってマラヤ共産党は「マラヤ連邦」（マレー半島とシンガポールを含む）の完全独立のため、イギリス帝国主義とラザク・リー・クアン・ユーかいらい政権と闘っているのである。共産党の指導する人民解放軍による武装闘争は、タイ国境に近い

ケダ、ケランタン、ペラクの三州にわたっている。同胞、友人の皆さん

第二次世界大戦直後、イギリス帝国主義はわが国民の独立要求を無視して、敢然とその植民地支配を回復した。一九四八年六月二〇日イギリス帝国主義はわが国の人民にたいして植民地戦争を開始し、日増しに高まっていたわが国民の民族解放運動を血なまぐさい手段で打消せうと企てた。しかし民族独立の実現を要求する広汎な人民の堅い決意と英雄的な民族解放軍の抵抗は敵の妄想を粉碎した。戦争中敵の植民地支配は根本的に動揺し、人民の民族解放運動は急速に発展をとげた。

一九五七年八月三十一日イギリス帝国主義は非常な孤立と困難の中に押しこまれ、マラヤ連邦の「独立」の宣言をせまられ、露骨で直接の旧植民地支配方式を、かくれみとの間接の新植民地支配方式に取替えた。イギリス帝国主義は政治から退場したとた

ん、ラーマン一派を利用していわゆる「独立」実現の欺瞞をおこない、人民の反帝闘争を麻痺させようとたくらんだ。

しかしイギリス帝国主義とその手先はこの陰謀をけつして実現できなかった。ここ数年來マラヤ民族解放軍の長期間にわたる断乎たる武装闘争にはげまされて、わが国の人民の真の独立、民主、平和及びマレー半島とシンガポールの再統一を闘いとる闘争はさらに一歩前進し、北カリマンタン人民の民族解放運動も高まり武装闘争に発展した。東南アジアのあらゆる反帝、反新旧植民地主義の新興勢力は日増しに壮大となり、東南アジアにおけるアメリカ・イギリス両帝国主義勢力は日一日と困難に落ち込んでいった。したがって、アメリカ帝国主義とその道具である国連の支持の下、イギリス帝国主義はラーマン派、リー・クアン・ユー派とサラワク・サバの反動勢力を利用して、マレーシアを強行成立し、かれらをわが国民と北カリマンタン人民の愛国闘争を鎮圧し、インドネシア人民およびその他東南ア

アジア諸国人民の平和と安全を脅す道具に仕立てた。一九六三年九月一六日新植民地主義「マレーシア」が成立してから、ラーマン一派は国内的において日一日と重大な困難に直面し、イギリス帝国主義の銃剣による支持にたよって人民にたいして武力鎮圧を強行し、その支配を維持している。一派はわが国全域に非常事態を宣言し、愛国人士を次々と大量に逮捕し、政党、労組、学生団体その他の大衆組織が弾圧されている。一派は気違いじみた軍拡を行ない、人民に徴兵令を強い、イギリス帝国の揺ぐ植民地支配を救うための「銃弾」にしている。

この軍拡によるぼう大な財政の赤字を埋めるために、一派はさらに税率を高め、新項目の税をふやし、人民とくに労働者、農民、下層大衆の収奪を強化した。

ラーマン一派はアジア・アフリカ諸国の中で極めて孤立している。一派にたいするインドネシア人民の対抗政策はマラヤ人民の正義の闘争にたいする新興勢力の同情と支持を端的に示すものである。一派

の側に立つものは帝国主義と各国の反対派のみである。

イギリス帝国主義は出しうる兵力を最大限にわが国と北カリマンタンに派遣し、わが国と北カリマンタン人民を脅迫し、インドネシア人民を攻撃しようと企てているアメリカ帝国主義も、わが国、北カリマンタンそしてインドネシア人民に対して、その武力デモンストレーションを行ない、ラーマン一派に軍事援助を提供してわが国と北カリマンタンに侵透しようとしている。これらイギリス、アメリカ帝国主義の戦争挑発は東南アジアの緊張をさらに激化させている。

イギリス、アメリカ帝国主義と反動勢力がいかに気違いじみた振舞いをして、最後は失敗に帰すにちがいない。

マラヤ民族解放同盟は国の内外、合法又は非合法を問わずすべての「マレーシア」に反対する愛国政党、団体、及び国内外の同胞に心から熱烈に呼びかける。

われわれの間に政治的見解が多少違っていても、互いに団結して一つの強大な統一戦線を結成し、「マレーシア」粉砕、わが国の真の独立、民主、平和とマレー半島、シンガポールの再統一のために闘おう。

ここでマラヤ民族解放同盟は全国各民族、各階層の同胞に一つの当面の闘争綱領を提案する。われわれはこの綱領を基礎に、国内外のすべての「マレーシア」反対の愛国政党、団体及び愛国人士と会談をおこない、「一致できる点で一致し、異なるところはそのままにする」原則にもとづいて十分な協議をへて、一致点に達し、共同の敵に対する闘争の中で互いに支持し合い、密接に協力し共に前進することを強く願っている。

われわれの綱領は次のとおりである。

- (一) マラヤ(シンガポールを含む)の真の独立を実現する
イギリス帝国主義及びその手先ラーマン一派の新

植民地主義支配を倒し、マレー半島とシンガポールにあらゆる愛国党派の代表を含む民族民主連合政府を樹立する。

イギリス連邦から脱退し、イギリス、マラヤ軍事条約と相互援助協定を破棄し、外国軍事基地を撤廃し、すべての外国軍隊を撤退させる。

アメリカ帝国主義が軍事、政治、経済及び文化などの各方面において、わが国に侵入し、イギリス帝国主義に代ってわが国を統治しようとする全ての陰謀に反対する。

- (二) 広汎な民主制度を実現する

非常事態、内部安全法及びあらゆる労働者、農民の生活改善闘争とその他の大衆運動を禁止又は制限する法律を廃止する。住民登録証制度及び戦略村への集団居住を強制する政策を廃止し、人民の基本的権利がいかなる侵犯もうけないことを保障する。

ただちに無条件にすべての政治犯を釈放する
すべて強制送還又は強制的に国外追放された愛国

人士に帰国の自由を与える。

(四) 独立・民主の民族経済を樹立する

わが国におけるイギリス、アメリカ帝国主義とそ
の手先の農園（ゴム、椰子など）、鉱山、工場、銀
行、商社などの企業を没収して国有とする。労働組
合は国营企業の管理に参加し、国营企業の生産を監
督する権利を有する。

国营経済を導き手とした独立自主の民族経済をう
ちたて、手工場と小規模農園などを援助する。

平等で合理的な税務政策を実現し、汚職を根絶す
る。

(四) 人民の生活を改善する

積極的に労働者、雇人及び公務員などの生活を改
善する。八時間労働制を施行し、男女同一労働同一
賃金を実施し、失業と売春を根絶する。

土地を持たないか又は土地が足りない農民にたい
して、新しい土地の開墾の自由を保障し、その所有

権をみとめる。漁民に漁獲の自由を与える。全面的
に減租減息を実施し、あらゆる形式の高利貸の搾取
と中間商人の高率搾取を取締る。国は低利息又は無
利息で農民と漁民に貸付を与え、彼らの生産の発展
と生活の向上に力を貸す。

(四) 愛国、進歩の文化と教育を建設する

イギリス、アメリカ帝国主義と反動勢力の奴れい
・頹廢文化を一掃し祖国と人民に服務し、愛国主義
と民主主義精神を発揮する進歩的な、健全な文化と
教育を建設する。

全力をあげて各民族の母語（英語を含む）を教育
手段として小中学校を発展させる。全国的に無料の
小中学の義務教育を施行する。

各民族の母語を用いて成人教育を展開し、文盲を
一掃する。

マレー語、タミール語などの民族母語を教育手段
とする大学及び専門学院を設立し、現在の中国語、
英語を教育手段とする大学、専門学院の地位を認め

る。大学、専門学院の学問の自由を保障する。

(六) あらゆる分野で民族平等を実現する

イギリス帝国主義とラーマン一派の民族平等の原
則を踏みにじる種族主義を粉碎し、政治、経済、文
化及び教育などのあらゆる分野において、民族平等
の基礎の上に各民族人民の反帝の大団結をかため
る。

民族の大小にかかわらずひとしく自分の民族語の
使用とその民族の文化と教育を發展させる権利を有
する。各級の議会で多言語制を実施する。

自発性の原則にもとづいて、マレー語を異った各
民族の共通語に發展させる。イギリス帝国主義とラ
ーマン一派が「国語」を強制的に実行するファッシ
ン政策に断乎反対する。

すべての企業と政府機関において、民族、宗教を
問わず労働者、雇人及び公務員に平等の待遇を与え
る。山林地区にいる少数民族の経済、文化、教育お
よび衛生事業の發展を全力で助け、かれらの生活条

件の改善を積極的に助け、かれらが国の政治活動に
参加するように導く。

各民族人民がその民族の風俗、習慣を保持し又は
改革する自由を保障し、各民族人民の宗教信仰の自
由を保障する。

(四) 北カリマンタン人民の民族解放闘争を支持す
る

北カリマンタン人民の民族自決権を認める。
イギリスとラーマン一派の支配を打倒する北カリ
マンタン人民との共同闘争において、たえず団結を
強化し、新植民地主義の産物、マレーシアを徹底
的に粉碎する。

(六) 平和、自主、積極的外交政策を実施する

バンドン会議の平和共存原則に基づいて、アジア
・アフリカ諸国及びその他の諸国との間に外交関係
を樹立し、貿易を拡大し、文化交流を促進する。

アメリカを題目とする帝国主義と各国反動派の侵略政策と戦争政策に反対し、全世界各国人民の帝国主義反対、新旧植民地主義反対の正義の闘争を支持する。

内外の同胞の皆さん

国際情勢はわれわれに有利な方向に発展している。日増しに高まる民族解放運動の波はすでに、アジア・アフリカ・ラテンアメリカをとりまいていり、三千万の英雄的ベトナム人民の南部解放、北部防衛、祖国統一の勝利への闘いはアメリカ帝国主義の世界侵略政策と戦争政策に重大な打撃を与え、各国人民の革命闘争を支援し、激励した。ベトナム人民の反米救国闘争はわが国人民にも輝かしい模範を示してくれた。

わが国人民の闘争はアメリカを頭とする帝国主義、新旧植民地主義に反対する世界人民の闘争の一環であり、正義のそして進歩的闘争である。われわれは前進する途上でいくたの困難に直面するかも知れない。しかし勇敢に闘争し、勇敢に勝利をおさめ

る革命精神を発揮すれば、イギリス帝国主義とラーマン一派及びその共犯者リ・クアン・ユイ一派の反民主、反人民政策に徹底して反対する。アメリカ帝国主義が軍事・政治・経済及び文化などの面でわが国に侵入しようとする一切の陰謀を徹底的に粉砕し、マラヤ民族解放軍を全面的に支持し、闘争の中で不断に敵の攻撃を挫折させ、革命の力量を発展させればわれわれの事業は必ず勝利する。

各民族人民は広汎に團結し、マレーシアを粉砕し、イギリス帝国主義とその手先の新植民地主義を打倒し、わが国の真の独立、民主、平和及びマレー半島とシンガポールの再統一のために徹底して闘おう。

マラヤ民族解放同盟中央委員会

一九六五年三月一日

(一九六五新しいマラヤ第二期より)

〈特別寄稿〉

ネ・ウィン・ファッショ政権の打倒にむかって

「革命ビルマ青年前衛」

〔「連帯」編集委員会訳〕

「連帯」編集部は、さる一月、発刊の辞の英訳文を第三世界その他解放闘争を闘う世界中の組織、個人に送った。それにはたいして多くの返事がよせられたが、そのなかで、ヨーロッパ各地に在住するビルマ人留学生によって結成されている「革命ビルマ青年前衛」より、連帯のあいさつに加えて、ビルマ情勢について、以下のように報告と訴えについての文章が送られてきた。

一 裏切りもの、ネ・ウィン

一八八五年にビルマは英帝国主義に植民地化された。それ以来、ビルマ人民は独立のためのさまざまな武装蜂起や合法的な闘争を展開してきたのであった。

一九四八年には、革命的なビルマ人民の反植民地闘争は最終的な局面に達していた。英帝国主義は、搾取をつづけるために、ビルマ地主・買弁資本家、その他の搾取階層に國家機構を

移譲したのであった。

一九四八年三月二十八日、帝国主義の支援のもと、ビルマの裏切り者たちは、内戦を開始し、帝国主義、封建主義と闘うビルマ人民にたいする弾圧を強化した。

経済的危機に次々と見舞われたビルマの支配階級のさまざまな派閥は、お互いに権力闘争に熱中した。一九六二年三月二日には、ネ・ウインを頭とするファシスト軍事ギャングが政権の座についた。

二 ビルマにおけるファシストの頭目

すべてのビルマ人はネ・ウインがファシストの頭目であることをよく知っている。かれは地主の息子であり、第二次大戦前は、当時の反動派バ・セインの忠僕であった。日本帝国主義がビルマ侵略をたくらんでいたとき、ビルマ反動派によって日本に送られた。日帝は彼を海南島に送り、その後日本の侵略に奉仕させるために本国に送り返した。日本侵略者がビルマを占領したとき、ネ・ウインは、おめがめにかないビルマ軍上級将校に任命されたのであった。

日本ファシストがビルマより追放されたのちは、ネ・ウインはイギリス新植民地主義者にくらがえた。彼は日本ファシストにたいしたのと同様に忠実にイギリスに奉仕したのであった。その結果、イギリスもまた、彼をビルマ軍上級将校に任命した。ネ・ウインは主人たちの信任にこたえるために、一九四七―四八年の間、反英新植民地主義運動を展開していた中部ビルマの革命的農民たちの多くを拷問し、殺害した。

一九四一―六二年の間、地主、官僚資本家および新植民地主義者の利益擁護に貢献したため、ネ・ウィンに参謀長の地位が与えられた。ビルマで公式に知られていることだが、一九四八―五七年の期間だけで、参謀長ネ・ウィンは三万人以上の農民を殺し、三〇〇六カ村を焼きはらったのであった。

一九六三年一月には数十万の農民がラングーンに向かって行進し、ネ・ウィンに反人民的内戦を中止するように要求した。

アメリカ、ソ連、日本から援助された武器でもって、ネ・ウィンは革命的人民にたいする一連の「包囲せん滅」作戦を展開した。彼は地主、官僚資本家および新植民地主義者にたいして、人民武装勢力をせん滅するまで内戦をやめないと確約したのであった。

三 いわゆる「ビルマの社会主義への道」

一九六二年以来、半封建、半植民地ビルマは、ファシスト、ネ・ウィンの軍事政権の支配下におかれてきた。ネ・ウィンにひきいられたファシスト軍事ギャングは、ビルマの最大のペテノン師であり、どろぼうであり、搾取者であるということは、時間と事実が十分に証明した。彼らは、ビルマの反動勢力の中でも、もっともずるがしこく、残虐で卑劣な一派である。彼らは、帝國主義、封建主義、官僚資本主義の利益を、新しい形で保護しようとするところみをつづけている。かくれみみとしての議会も捨てて、彼らは、この国を、ファシズムで直接的に支配している。

ネ・ウィンにひきいられたファシストの軍事ギャングは、気のきいた政治用語をつかえば、革命的ビルマ人をあざむき、彼らが犯した犯罪をすべておいかくすことができるなど、実に子供っぽく考えている。彼らは、自分たちのファシスト軍事ギャングに、「革命評議会」という美しい名前をつけている。また、ビルマの搾取への道を「ビルマの社会主義への道」と呼んでいる。「国有化」のかくれみみの下で、ファシストの頭目ネ・ウィンにひきいられた「革命評議会」はこの国の海産物、鉱山、通信、交通、商業取引、映画および他の産業を独占化と搾取を実行するために強奪した。一九六三年以来、彼らはいくつかの「法律」を制定し、農産物を独占化し、ビルマ人口の八五%を占める農民すべてを搾取するために「農業協同組合」を設立した。ビルマの農民たちは、怒りをこめて、語るだろう。いかに彼らが、ネ・ウィンのファシスト軍事政権によって、自分たちの米を、世界市場価格の三分の一の値段で、何年もの間、売ることを強制されたかを、彼らの年間所得は一八九キヤット（四七ドル二五セント）にしかならない。しかも米からの外貨収入のほとんどすべてを彼らがつくり出してしまっているのだ。

ビルマの労働者たちもやはり悲惨である。彼らはアジアでもっとも低賃金である。彼らは、飢餓賃金で働かされ、極端な貧困の中で生きている。彼らは労働者としてこの基本的権利をすべて奪われている。彼らは、ネ・ウィンのギャングたちによって、しばしば「義務労働」を強いられている。ネ・ウィンのM・I・S（軍事調査機関）およびS・A・C（保安行政委員会）が、じっと見張っているために、彼らは何もいえず、何もできない。ビルマでは約三百万人が、慢性の失業および半失業の状態におかれている。

搾取は、労働者や農民に限られるのではない。中産階級もまた、弱小資本家や商人たちと同じく、非常に困難な経済状況におかれている。一九六四年五月、ファシスト頭目ネ・ウィンにひきいられた「革命評議会」は、一〇〇キヤットと五〇キヤット紙幣を無価値だと宣言する命令を発した。ネ・ウィンにひきいられるファシスト軍事ギャングは、一撃で、四億キヤット（一億ドル）を、国から強奪したのである。

ビルマは経済的に苦しみ、健康、教育、文化などといった事柄は、ほとんどかえりみられていない。二千五百万人の人口に対して、医者は一八一人しかいない。資格のある青年の四分の三は学校に行くことができない。軍事政権は、平均して、一年に九一キヤットしか学生のために使っていないが、反革命軍兵士たちのためには、四四八二キヤットを使っている。後者はいうまでもなく、平均的軍事支出である。巨額な予算の分配は、ほとんど政府高官のポケットをみだしている。一般兵士は、わずかな配分しかうけていない。そこで彼は同時にどろぼうにならねばならない。一九六四年から六五年までのデータによると、陸軍大佐は、正式に一年平均一六六八〇キヤットの給料をうけてっている。これは、農民の収入の約九〇倍にあたる。非公式に超過利得を手に入れるために、彼らは何人かの大買弁と協力し、首都ラングーンその他の都市で闇市場を操作する。これがこの連中が確実に金をもうけるやり方なのだ。

いまや「革命評議会」のギャングどもは、ビルマにおける最も富んだ官僚ブルジョアジーである。彼らは、誰をとっても、別荘、自動車、国内と国外にある資産を持っている。「代表団」「外遊」「病氣療養」等の名目で、これらのギャングたちは西欧諸国に逃亡し、金を外国銀行「フ・コースとカントリー・クラブ」を買った。

四 血にうえた本性

ネ・ウィンにひきいられたファシスト軍事集団はテロリストである。どんな法律的レッテルもはらずに、彼らは人民を平気で投獄する。彼らは、革命的闘士を、逮捕の場で殺し、拷問する。彼らはビルマ東北部のラシオで職業的暗殺者を訓練する。ペグー市南部のインダンからは、彼らは懲罰部隊を農村に送りこむ。この部隊のゆくところ、彼らは硝煙と廃跡と死を残してゆく。

過去九年間に、ネ・ウィンにひきいられたファシスト軍事ギャングは三回の大虐殺をおこなった。第一回目は一九六二年七月七日におこなわれた。ラングーン大学の学生がデモ中に、百名大学構内で射殺された。反英闘争の歴史的建物である「学生組合」の内部にいた多くの学生がダイナマイトで吹きとばされたのである。第二回目の虐殺は、数カ月にわたる陰謀的準備のうえ、一九六七年六月二六日に実行された。三日間にわたって、私服をきたネ・ウィンの兵士がラングーンの華僑数百名を殺害し、中国大使館を襲い、館内の外交官を刺殺したのである。それによってネ・ウィンの軍事ギャングは、アメリカ、ソ連、日本、インドに報酬を要求した。それとともに、これは失敗におわったけれど、人民の注意を本質からわきにそらすとした。第

三回目の虐殺は一九六七年八月におこなわれた。約千人の飢えたアラカン族が、ビルマ西岸の米穀積出港アキャットで米を放出せよと請願していた。ファシスト軍事政権はそのうち約百名を射殺し、多くの者を傷つけた。

ネ・ウインにひきいられたファシスト軍事ギャングは、いたるところに、いわゆる「保安行政委員会」を設立し、軍事調査機関(MIS)要員をいたるところに、人民のあらゆる運動のすみずみまで送りこんだ。軍の哨戒点はいたるところにもうけられ、旅行者は一人のこらず身体を捜検され、尋問される。この耐えがたい状況にどんな形であれ抗議したり、デモをしたりすれば、それは破壊的プロバガンダとみなされる。どんなふつうの市民でもちょっとでもおかしな素振りをすれば自分の家の戸口までMISのスパイをつれてくることになる。どんな集会も「反革命的」企図とみなされる。一九六三年以来、すべての政党と大衆組織——重量あげチームまでそこには含まれるのだ——は禁止されている。

五 中立的外交政策の衣裳

「中立的外交政策」の衣裳の下に、ネ・ウイン・ファシスト軍事ギャングは、まず第一に、ビルマ人民と近隣諸国の革命的人民、そして世界の革命的人民の連帯を断ち切った。彼らは、ビルマ人民が、帝国主義、軍国主義、人種主義、シオニズム、新植民地主義について、抗議することも、示威行動を組織することも、語ることも、厳格に禁止した。彼らはアメリカのインドシナ侵略に反対してアメリカ大使館前で抗議した青年・学生を投獄した。

ネ・ウインのファシスト軍事政権が、アメリカ合衆国から巨大な軍事援助を受けとっていることは秘密ではない。『ニューヨーク・タイムズ』『ニューズ・サービス』の報道によれば、米軍のジェット機は、ビルマの密林と低地の湿地帯にいるゲリラに対して使うために、大量の特殊兵器を輸入した。アメリカの調査センターは、反乱鎮圧活動の発展についての報告が満足のものだと確認した。アメリカの空軍訓練員たちは、ネ・ウインのパイロットを訓練し、F.86戦闘機の操縦を教えた。

ネ・ウインのファシスト軍事政権はまた他の反共諸国からも軍事援助を受けとっている。この政権は、帝国主義の保護の下にあるすべての反動的政権と結びついた。ネ・ウインのMIS委員はまたシオニストによる訓練もうけている。「インド社会主義者」「インディラ・ガンジー」と「ビルマ社会主義者」ネ・ウインの間には、インド・ビルマ国境の少数民族を抑圧するため、の協力関係が存在している。朴正熙、チュニルキ、蒋介石、スハルト、ネ・ウインの間にも、相互支持の関係が存在する。

佐藤栄作に代表される日本軍国主義は、ネ・ウインにひきいられるビルマのファシスト軍事ギャングによって、本心に心から迎えられている。これは驚くに当らない。

なぜなら、第二次世界大戦以来、この師弟はつねに協力してきたからである。今日、日本の独占資本はビルマにおいて大変活発に動いている。『青年』代表団、『友好』代表団、『貿易』代表団、『投資』代表団、『技術協力』代表団、『経済調査』代表団、『石油調査』代表団等々がきびずを接してビルマを訪れ、また去って行く。

ネ・ウインを頭目とするファシスト・軍事ギャングは、帝国主義者に祖国を売り渡し、同時に帝国主義者の援助を利用して、彼らの軍隊を拡張して、人民革命勢力にたいし大規模な攻撃をかけてきている。ネ・ウインの「ラングーン政権」はすでに、国際独占資本から数億ドルの援助を受けてきたと報じられている。そのうち五〇〇万ドルはアメリカから、二七五〇万ドルは世界銀行から、一億四〇〇万ドルは日本から、一億三〇〇万ドルは西独から来たものである。

六 衣食住の不安

ネ・ウインによる搾取、独占化および反人民的内戦のビルマの方途のせいで、ビルマの全民族は、衣食住に対する深刻な不安におちこんでいる。ビルマにおける生産は年々低下し、物価は毎月上昇している。供給制度は混乱状態にある。ロンギー（サロン＝腰布）用の布がただ年に一枚だけ、各個人に与えられる。ブラック・マーケットと餓えでやせおとろえた人々がいたるところに見られる。伝統的に農業に依存しているビルマにおいて、米、ごま、落花生、とうもろこしの生産が危機的に低下しつつある。米の輸出は、戦前の平均、二六八万トンから、一九六八年のわずか三四万トンに急落した。一九七〇年四月には数字はわずか一三万トンに下った。かつて米の生産国として知られたビルマは、今日、飢えの国になり、しかも牢獄は、裁判なしに拘留されている政治犯で一杯なのである。

都市の労働者は、月八二キヤットを稼いでいる。この収入で、どうやって、彼らはビス(三

・六ポンド)あたり八一―二キヤットの魚や肉、ビスあたり一〇キヤットの食用油、ピー(五・六ポンド)あたり四キヤットの米を買うことができようか。

余分の仕事をしないかぎり、彼らは生活することができないのだ。ネ・ウインのファシスト軍事政権は、労働者階級の深刻な経済問題を解決するか、軽減するために何らの注意も払っていない。彼らはただ、いかにしてすべてを労働者階級のせいにするか、ということだけを心得ている。ネ・ウインのファシスト・軍事政権の新聞の一つである『ガーディアン』は、「遅く出勤して、早く帰宅し、怠けて働らく―これが今日の労働者のルールのように思われる。……我が『社会主義的』規律がやぶられることを許すことはできない!」といている。ファシストの頭目ネ・ウインの『ビルマ社会主義綱領党』の代表は、一九六七年の労働者ゼミナールにおいて労働者階級を非難して、こういった。「ある労働者たちは、今日は労働者の時代だと考えている。したいようにするのがよい。だがこれはがまんならないことだ!」血に飢えたファシストの頭目ネ・ウインは、最近牙をむきだしにして、こう大言壮語した。「我が神聖なる『社会主義的』規律を強化するために、ドラスチックな措置が、絶対に必要とされているのだ!」

七 人民ビルマをめざす闘争

プロレタリアートの指導のもと、ビルマ人民は、ビルマにおいて、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の利益を新しい形態で守ろうと空しく企てているネ・ウイン・ファシスト軍事政権

にたいして、全国的な人民戦争を展開してきた。現在、人民武装勢力は、ベグ高地の主戦場においても、デルタ地区においても、テナセリム、アラカン、北西地区においても、チン高原においても、カチン州においても、北部リーチズ地区においても、中央ビルマにおいても、シャン州においても、圧倒的な軍事的勝利を実現した。すべての少数民族もまた武器を手にとり、この解放戦争に加わっている。ネ・ウィン・ファシスト・軍事政権の代弁者である『ワーキング・ピープルズ・デイリー』でさえも、人民武装勢力が、かつて大都市がゲリラに支配されていた一九五〇年と同じレベルに達するまでに発展したことを、苦々しくも認めている。

ビルマの全民族の共通の敵、ネ・ウィン・ファシスト軍事政権は、今や強力な人民戦争によって包囲されている。ビルマ反動の努力も、ビルマと国際反動の共同の努力も、ビルマの歴史の流れを変えることはできない。

ビルマ人民革命は必ず勝利する！
ビルマは、ビルマ全民族のものだ！

タイにおけるゲリラ闘争の現状

マイク・トビン
(守谷 暁子訳)

ここに訳出するのは、パシフィック・スタディズ・センター(PSC)によって発行された『パシフィック・リサーチ・アンド・ワールド・テレグラム』誌一九六九年九月号にのったものである。なお七〇年以降のタイ愛国戦線の戦闘日誌およびタイ共産党一〇項目綱領(資料)をあわせて参照されたい。

一九六九年、タイの四カ所の地方でゲリラ闘争がおこなわれている。一九六五年、東北部のナコン・ファノム省で最初の銃声がなりひびいて以来、タイ政府権力にたいする武装レジスタンスは全国の七一省のうち三三省にまで広がった。

一九六八年に東北地方で活動していたゲリラの数は、二千人以上に及ぶが、これらの闘士たちは、ラオ、プタイ、クメール族とベトナム人で構成されている。北部では、一九六七年に政府にたいする武装闘争が開始され、これから一年もたたぬうちにメオ族は一千人を越す戦闘勢

力をもつていたった。南部のタイ・マレーシア国境沿いの共産勢力は四省で拠点を確保している。南部ゲリラ勢力の大部分は、大陸系中国人とマレー系回教徒である。中央部の平原地域では、都市のタイ人エリートたちが投機策として広大な土地を買占めているので農民たちの不安はますますつのっている。

米商務省の報告（一九六六年）によれば、自作農は三〇パーセントに激減し、農民の七〇パーセントまでが小作農を強いられている。

この記事は、武装闘争の出現と、こうした闘いを展開しているタイ人民の状況について述べたものである。同時に、タイ政府の反乱軍にたいする軍事作戦にアメリカがどの程度介入しているかを明らかにし、アメリカの存在が土地を持たぬ農民階級や都市プロレタリアートを生みだし、タイ人民の反帝国主義的感情を醸成している経過を追求している。

権力と人民

タイの国土は、フランスほどの大きさで、人口は三千四百万人、うち八五パーセントが農民である。この国は、西欧の教育を受けたタイ系民族グループの上流階級の連中によって支配されている。国内には多くの少数民族がいる。東北地方のラオ族（八百万）およびベトナム人（四万）、北部の高原部族（二十五万）および大陸系中国人（四百万）、南部のマレー人（九十万）。大部分の国民は中央の公式タイ語を話さないようだ。

一九三二年、クーデターによりプミフォル国王の絶対支配が覆えられて以来、タイは軍部指

配による立憲君主制をとっている。一九五八年一〇月、サリット・タナラット陸軍元帥が実権を握った際、彼は政党と労働組合を禁止した。一九六八年、支配エリートは、戒厳令施行の決定を下し、これが火種となり一九五七年の不正選挙以来始めての学生デモがバンコックでおこなわれた。

政府部内の民間要人と同様に、タイの軍隊は都市エリート層によって支配されている。軍部が政府内部で権力をめざし実際張り合っているのは警察だけである。タイの支配階級は官僚制度によって農民とつながっており、その末端は村長へと続いている。

官僚社会での出世は良いコネがあるかどうかにかかっている。役人たちは自分の出身地の文化生活には振り向きもせず、バンコックの価値観で行動し、その生活様式を模倣している。モエルマン教授も述べているように、「バンコックはすべての勢力の的であり、あらゆる正当文化の試金場であり野心家たちのゴールであり、政治的コントロールの主要センターであり、文化の主要な発生源でもある。ある意味で、タイは都市国家であり、バンコックはその都市である。」

第二次大戦以来、タイの指導者は、アメリカと緊密な関係を保っている。SEATOは、バンコックに本部をおいている。一九五〇年、タイはアメリカ援助のため朝鮮に軍隊を派遣し、現在では一万二千人の部隊がベトナムで戦闘に参加している。アメリカは、一九六五年以来、二〇億ドル以上をタイにつきこんでおり、このうちの大部分はタイ国内の一一の軍事基地の建設および活動に使用されている。東北タイのウドン飛行場から、CIAの爆撃機とパイロット

がラオスを爆撃した一九六四年以来、タイは北ベトナムおよびパテト・ラオに対する攻撃基地として使用されている。北ベトナム爆撃部隊のうち、八〇パーセントがタイ基地から飛び立ったものである。米国際開発局(AID)の高官によれば、一九六七年におけるアメリカのタイ援助のうち、非軍事用資金での最大支出はタイの警察力の訓練に当てられた。

アメリカ空軍は、タイの反乱鎮圧軍を戦闘地域へ空輸するためのヘリコプター、飛行機、パイロットを供給している。アメリカ軍は、また、タイの軍隊と警察の訓練をおこない、緊急の際の軍事的反撃に必要な戦略道路および通信網を建設している。スタンフォード研究所、コーネル航空研究所、コーネル大学、ミシガン大学、ランド・コーポレーションやフィルコIIフールドなどの民間研究機関や大学、法人が反乱軍対策の研究をおこなっている。

武装レジスタンスの出現

タイにおける革命闘争は、一九六五年、銃撃戦の段階に入り、序々に強化・拡大されている。タイ政府が革命闘争にたいし徹底的な弾圧計画を開始したにもかかわらず、いや、おそらくはそれゆえにこそ、こうした情況が生み出されているのである。闘いの内容は、少数民族のもつさまざまな要求や彼らがかかえている問題などの関係上、地域によって多種多様である。

武装レジスタンスのレベルはまだ低い。情報が多少与えられている四つの戦線の統計を集計してみると、ゲリラの総勢力はおよそ四千人少々である。ゲリラの積極的な支持者数は不明で

ある。最近二年間に、闘いはバンコック周辺の中央平原のタイ人にまで波及し、この結果いくつかの省において戒厳令が施された。

歴史的には、ゲリラの政治指導者の多くはタイ共産党の出身である。ホー・チ・ミンは一九二〇年後半にタイ東北部に住んでおり、タイ共産党が結成されたのは一九三五年である。彼は仏僧に変装し、インドシナ共産党の活動を指揮し、第三インターナショナル極東支部の指導にあたった。

第二次大戦中、タイ政府が日本人と協力していた当時、「自由タイ運動」(FTM)は東北部において反日ゲリラ戦に従事していた。FTMは、タイのラオ人とラオス人民を結合させ、独立したラオ民族の創造を主張した。タイにはラオ人が八百万人いるのにたいし、ラオス国境地帯にはおよそ僅か百万人しかない。

FTMの指導者トラング・セリカーンが一九五二年に死去した際、彼の部下たちは、パテト・ラオとタイ共産党に強力なつながりを持つ共産主義者クロン・チャンタウオンが率いる「連帯運動」に統合された。同じ年に、タイ軍部は共産党を非合法とした。六年後、タナラット陸軍元帥によるクーデターの後に、政府はクロンを含む百名の東北部における政治指導者を逮捕した。クロンは一九六一年に処刑された。彼の処刑後、クロンは東北部農民の民族的英雄となり、農民たちの間では彼の偉業を物語る歌が歌われている。

彼の処刑以後、運動は縮小され、地下に潜ったので、表面的には政治活動に三年間の小休止があった。一九六四年一二月、ラオスのパテト・ラオ領で活動していた共産主義者のラジオ中

継局、「タイ人民の声」がタイ独立運動(TIM)の結成を發展した。TIMの声明は、すべてのタイ愛国者にたいして、アメリカを追いだし、王国タイ政府を打倒し、代りに愛国的かつ民主的な政党の代表によって構成される政府を作りだすために協力することを呼びかけた。

タイ愛国戦線(TPF)の結成

一九六五年一月、南ベトナム民族解放戦線と同様に、人民の闘争の政治的権力として活動するために、共産主義者および民族主義勢力によってタイ愛国戦線(TPF)が結成された。結成後間もなく、タイ独立運動はTPFの政治指導を受入れると声明した。

タイ共産党およびTPFは、「タイは全く新しい型のアメリカ帝国主義植民地である。われわれの国は、アメリカ帝国主義が侵略戦争をおこなうための重要な戦略基地となっている。」と主張している。一方では、政治的抵抗が政府による苛酷な弾圧を受け、他方では、タイにおけるアメリカの利益が莫大であるということの二要素が、CPTをして「断固として人民を武装闘争に導き、農民大衆を動員し、農村における根拠地を確立し、人民の戦争を堅持し、農村から都市を包圍し、最終的にタイにおける国家権力を掌握することを決意」させている。これらの目標を達成するため、CPTは中国のモデルを参照して、「人民の軍隊建設をめざして努力を集中している。」

一五六九年の初期に、タイ・ゲリラは新たに組織された最高司令部のもとに統一されるとの発表があった。同時に、CPTは敵の人員損失数を明らかにした。それによると、一九六八年

だけでも二千四百人が殺され、航空機一一機が撃墜され、政府軍との戦闘は五八〇回にわたった。

東北部における闘い

タイの東北部は国土と人口の約三分の一を占める。山脈により中央平原から分断されているので、物理的にも文化的にもバンコックからは孤立している。長期にわたる乾季と、他の地方よりも耕作地が少ないことから、この地方は比較的に貧しい。農民の九五パーセントは自分の土地を持っている。文盲率は高い。

ここには八百万のラオ族の他にインドシナ戦争(一九四六―五四)の間にタイへ避難してきた北ベトナム人が四万人いる。これら北ベトナム人の送還努力は、一九六四年七月、ハノイが戦争状態であることを理由として、受入れは不可能であると声明したため実現しなかった。これらの大部分の人々は、ホー・チー・ミンの支持者であり、彼の肖像画が彼らの家に掲げられている。ベトナム労働党(北ベトナム共産党)は、これらベトナム人の間に広範な秘密組織をもっており、ゲリラ勢力のための資金調達および人員補充がおこなわれている。

この地域の他の少数民族はプタイ族とクメール族である。両者とも中央政府にたいし敵意を抱き、運動のためにゲリラを提供している。

東北部は中央のタイ政府にたいする政治的反抗の歴史をもっている。「自由タイ」と「連帯運動」が一九五〇年代後半に存在し、東北部において政治指導者にたいして弾圧が下されたこ

とは、中央との衝突があったことを示している。とりわけ、北ベトナム人になりたいする政府の弾圧は厳しく、彼らは公然と集会をもつことも許されず、自分たちの学校さえも持つことが禁止された。また東北部以外へ旅行することも許されなかった。

一九六五年に武装レジスタンスの段階に達するまでには数年間にわたる闘争の準備期間を要した。すでに一九六二年には、北ベトナムのホア・ビンにおいて幹部訓練がおこなわれていた。米國務省発表によれば、少なくとも五百人が一九六七年までにホア・ビンで訓練を受け、パテト・ラオ領および中国本部において、八百人が訓練された。ラオス領と中国領の地下放送は、毎週長時間にわたって、タイ語およびいくつかの少数民族の言葉でプログラムを流した。

タイ政府の発表では、一九六七年におけるゲリラ数は千七百人、政府軍により殺害された者二四七人、投獄された者四〇六人、逮捕されたゲリラ支持者は二、六一八人にのぼった。政府によれば、二、一六二人のゲリラが脱走したことになるが、この数字は政府発表のゲリラ総数を上回っている。

この年における兵士たちの主要な活動は、武装宣伝であった。ゲリラたちは五〇人毎のチームを編成して村に入り、住民を集め、タノム政権に反対するよう呼びかけた。ゲリラたちは住民の困窮、税金、役人たちの横暴さについて語った。チームの女性たちが伝統的なタイの踊りや歌を披露することもしばしばあった。彼らが村を去る時は、住民から米やその他の食料品を徴集した。住民たちが喜んで与えたかどうかは分らない。タイの役人によれば、こうした集会が一九六七年に二三七回催された。

しかし翌年になると集会はほとんど持たれなくなったと米國務省は発表している。これは、おそらく東北部において政府軍がきびしい弾圧を加えた結果であろう。しかし、弾圧にもかかわらず、一九六五年から始まった政府役人、警官、警察への密告者たちに対する攻撃は、六七年には毎月一〇パーセントの割合で増加しており、六八年末期には一段とその激しさをました。

ゲリラ戦士たちは人民から食糧を調達したり、また自分たちもジャングル内の菜園で耕作をして食糧を確保している。彼らの武器はアメリカ製で、アメリカの軍事援助としてラオス政府に与えられたものをパテト・ラオが獲得したものらしい。タイ政府軍の方でも、中国製や東欧の社会主義国製の武器を捕獲している。

ベトナム人から見れば、タイのゲリラ兵士たちの訓練レベルは依然として低いが、彼らは「戦争を通して戦争を学ぶ」(毛沢東の引用・CPTのスローガン)ので軍事的経験はますます豊かになっている。各戦闘の後にはゲリラたちは成功・失敗を検討し合う。彼らはこれは「軍事的民主主義」と呼んでいる。現在の彼らの最大任務は、村々に政治機関を確立することに集中されている。

一九六八年七月、ウドンの米空軍基地にゲリラの小隊が攻撃をかけ航空機を破壊した時にゲリラ闘争の新しい局面が開かれた。それ以前までは、ゲリラの方針は米軍との戦闘を回避していた。

東北部における対反乱軍活動

一九六七年、東北部で積極的に共產主義者の弾圧に活躍していたのはおよそ一万一千人だった。『北京周報』によれば、翌年六万人が積極的な「囲い込みと弾圧」をおこなった。

一九六五年、共產主義者弾圧指揮の司令部（CSOC）が九万の兵を擁するタイ政府軍最高司令官で内務大臣を兼任するプラバス・チャルスチェン將軍によって設立された。プラバスは、アメリカの陸軍大学を卒業し、反乱軍対策として「市民的行動」主義を提唱している陸軍中将サイユド・ケルドボルをCSOCの指揮官に任命した。

アメリカの弾圧作戦の役割は広範囲にわたっている。一九六六年末における米国際開発局使節団のハワード・L・パーソンズ長官の発言では、アメリカのタイ援助の六〇パーセントまでが東北地方に支出されている。翌年の六七年では、非軍事援助額五千三百万ドルのうち四〇パーセントが警官の訓練および装備に使用され、二〇パーセントが地方の戦略道路網建設計画に支出された。対反乱軍工作としてアメリカが直接タイ政府に与えた援助総額は約五千ドルにのぼる。この額には対反乱軍工作の研究のための米民間研究機関や大学などに対する支出は含まれていない。タイ政府軍のための空軍の機動力は米空軍第六〇六航空司令大隊によって提供されている。

タイ政府の反乱軍制圧計画の一つに、当初アメリカが一、五〇〇万ドルを投じて作りあげた「機動開発部隊」がある。部隊は全部で一六あり、各部隊は一二〇人の武装兵で構成され、彼らは村に入ってゆき、いわゆる「衝撃計画」に従事する。住民たちにタイの支配者がこの地域での戦いを案じていると言いつ聞かせるのである。このようなプログラムは、住民たちの物質的

状況を改善することにはしばしば役立つかれども、USAIDに従事している何人かの役人の話では、地方の農民にたいするタイの官僚たちの態度は、タイ政権にたいする彼らの敵意をますますすかきかたてているというのが真実のようだ。

また別の「地方開発促進」計画では、アメリカは、一九六七年一二月までに一、四〇〇万ドルを支出し、村落の奥深くにまで道路を建設し、政府軍が緊急の際奥地まで部隊を動かせるようにした。一九六七年一月のアメリカ大使マーチンの言明では、八千人のアメリカ軍隊が戦略道路と通信網の建設に従事している。それでもなお、輸送車両用道路の近辺に居住する村落は二〇パーセントにすぎない。

これ以外に地方を訪れ、農民たちに政府の地方計画を説明して周る宣伝隊があり、これはタイ政府と「米情報機動チーム」との共同プログラムである。この計画は、充たされぬ農民の期待をますます高めるとともに、政府役人たちの傲慢な態度を見せつけることにより、農民たちに敵対心を抱かせるといふ二重の効果をあげた。

一九七〇年までには、東北部の三省において九千四百人からなる「部落防衛隊」が駐留するようになるだろう（警官に反共主義と市民行動論の教育を一週間にあわせて実施）この計画では五

から一〇部落毎に八人から二〇人におよぶ警官を配置することになっている。この作戦が何らかの成功を収めたかどうかは不明である。米國務省発表では東北部におけるゲリラ活動は一九六七年のピーク時に比べて翌年の六八年は不振に陥っている。にもかかわらず、國務省発表は、タイの官僚と農民の接触度が増加すればするほど、農民たちの不満が高

まっけてきている事実を数多く指摘している。市民活動計画を通して、部落の組織を手がけることは、革命勢力がよりたやすく任務を遂行できる内部機構を作り出すために役立つだけである。

元来、政治的な意図をもって作られ「市民的活動」が反乱軍制圧にアブローチしだしたのは、アメリカの対反乱軍攻撃が不充分であったためと思われる。一九六七年一〇月、共産主義者弾圧指揮司令部のもとにおける地方作戦の統制力は各省庁の手から取りあげられ、戒厳令が宣言された。

タイ北部の地勢はゲリラ戦には打ってつけである。ジャングルにおおわれた山脈には七千フィートの山がそびえ立ち、その間を縫って低地の谷間が点在している。

この地方の住民は二五万人の高原部族で、七つ以上の部族が混在しており、いくつかの部族は中国東部の雲南省や貴州出身である。彼らは文字をもっていない。およそ半数の男子とごく僅かの女子がタイ語を話す。部族民は小さな村落に住み、樹木の伐採や焼畑農耕を行なっている。王国末期に追放されたタイの官僚たちは、これら部族のことを語る時「非人間」とか「動物」とかの意味合いをもった言葉で話す。

政府が始めてタイのナン省のメオ族の中にゲリラがいることを知ったのは一九六七年の始めである。たった六カ月のうちに高原には一千人を越す武装した活動的な反政府の闘士が生れた。このめざましい増加は部族民にたいする政府のきわめて暴力的な処置が原因となっていた。一九六七年末と六八年の始めにタイ空軍は共産主義者が潜んでいると言われていた十数カ

所の村落を爆撃し、ナバーム弾を投下した。その結果、住民の総人口のおよそ四〇パーセントが避難民となった。このうちの約半分は低地の難民収容所に連行され、残りの半分は四千人はゲリラ制圧下にある山に逃れてきた。最初の一連の衝突におけるゲリラ側の損害は微少だったが、政府軍は、ゲリラの待伏せや交番奇襲によって百人以上の損失をこうむった。一九六八年の末までには、戦闘は新たに三省（ロエヒ、ベチブン、ヒサヌロク）など東部一五〇マイルにまで及んだ。数ヶ月にわたった激戦の間に数十の村落が壊滅した。ゲリラ側の発表によれば、政府軍の損害は、三百人が殺され、航空機の損壊二五機、ガンリン貯蔵所四カ所の全壊、装甲車三台およびその他三〇台の軍用輸送車の壊滅、橋の爆破三カ所となっている。ニューヨーク・タイムズの報道では、ナン省およびチェンглаイ省では八千人の住民が今年（一九六九年）の五月までに避難させられ、低地の難民収容所へ入れられた。

北部高原の闘士たちの政治組織に関してはほとんど知られていない。ナンからチェンライに至る境界を越えたパラト・ラオ領においては、ラオス政府のためにはなく、パテト・ラオ軍のために闘わんとするラオス内の少数のメオ族のための訓練センターがいくつかある。この訓練センターにタイのメオ族も相当数通っている。

南部における反乱

タイ南部はゲリラの根拠地と呼ばれうる唯一の地域である。ここでは、ゲリラ勢力が政府軍よりも軍事的優勢を保っており、革命の政治的権力が行政機関を執行している。

土地はジャングルにおおわれた山地で、スズとゴムに富んでおり、重要な採掘産業が成長している。三五〇万の人口のうち、九〇万人がマレー系の回教徒で、数万人が中国人である。これら両民族は、タイ領の中では自分たちの根拠地をもたず、最南部のマレー半島に置いている。最南部の四省では、人口の九〇パーセントが回教徒で、タイとその分離ならびにマレーシアの回教徒との統一を計画した強力な運動が展開されている。一九四八年にナラジワット省で回教徒の暴動があったが政府軍により鎮圧された。

南部におけるゲリラ活動は、一九四八年から六一年まで、第二次大戦中は日本軍と、それ以後はイギリス軍と闘った「マラヤ民族解放軍」(MNLA)の残党によって成長してきた。MNLAは、巧妙なイギリスの対反乱工作のために一度におよそ一万人が絶滅し、この戦いでダイマレーシア国境地帯の北部に部隊が移動してきた時には五百人ほどに激減していた。

タイ南部諸省で叫ばれる独立世論にのりつつ、加えて世界的ゴム価格の下落により住民に押しつけられる困窮も手伝って、ゲリラたちは一千人からなる独自の軍隊をもつにいたった。現在では民族解放軍と呼ばれ、彼らは国境の両側で活動している。解放軍はその支配下にある住民よりゴムとスズの利益から税を徴集する村の機関を作った。武装宣伝隊が各村を月に一回訪れ、宣伝工作、食糧の調達ならびに税の徴集をする。必要な時には、金は住民に分配され、医療援助が与えられる。NL A(解放軍)はゴム園の労務者やスズの採掘鉱夫たちの間で多数の支持を得ている。NL Aはまた回教徒の独立組織と緊密に連絡しており、その緊密度は回教徒の部隊と一緒に軍事作戦を展開しているほどである。そして回教徒とタイ系農民の中で農民の

組織を作り、ジャングルに隠された送信機から住民向けの放送をおこなっている。

人種的な関係から、NL Aは、バンコックのタイ共産党よりは直接的に北京の方へ結びついている。NL Aの前身的政治権力とマラヤ共産党はマラヤ共産主義青年同盟に再組織され、部落で活動している。最近組織されたタイ人民解放軍最高司令部と南部のゲリラたちの関係は知られていない。一九六五年、ゲリラのキャンプが数カ所(そのうちのいくつかは二百人を収容できるほどのものだった)タイ政府軍によって発見された。しかし、政府軍が始めてゲリラ勢力にたいする行動を開始できたのは、ようやく一九六六年に入ってからである。この時までには反乱は北部のトラン省にまで波及しており、ここでは主にタイ人たちが活躍していた。

タイ政府の対反乱軍工作努力は、およそ二千人の国境警備隊からなるタイ・マレーシア共同司令部の設立、機動的展開部隊および南部に大学を設置することに集中されている。

新しい戦線の行動開始

一九六七年、バンコックから南一七五マイルの地点ブラチャブ省で新しい戦線が行動を開始した。およそ三百人の反乱軍は「タノム・プロパス腐敗分子」に反対する宣伝印刷物を配布し、数名の役人を暗殺した。かれらは、反乱軍鎮圧のため派遣されてきた百名の警官チームを全滅させ、少なくとも一五〇名を殺した。警官と政府軍第一師団がこの地域に移動してきた際、村の住民たちはこの両者にたいし敵意を示した。大陸系中国人によって指導されているブラチャブのゲリラたちは、東北部戦線やバンコックのタイ共産党とも連絡を保っている。

中央部における反乱

最近の何千という海外投資家たちの流入と軍隊の到来によって、部分的には、タイの実業家たちは手っとり早く金になるサービス産業や高級住宅建設に投資している。かれらは、こうして得た利潤を再投資してバンコック周辺の土地を買占めしている。このような状態は、一方では、都市における低家賃住宅の深刻な不足をきたし、他方では、農民たちに都市に移動してきて家のない未熟練労働者階級の仲間入りをするか、さもなければ、小作人として土地に残るか、いずれかの選択を迫っている。中央平原の小作人は、一九三〇年に人口の三六パーセントだったのが、一九六〇年では六〇パーセントに上昇した。こうした困窮者にたいする締めつけは、かれらの不満をつのらせ、人民の中で武装闘争にたいする評価を高めている。

さらに農民の存在は消費市場では全く無視されているので、彼らは数多くの生産品とサービスを要求している。ローストン・シャープの話では、村には希望する新しい商品を購入するために必要なグループ活動をこなうための公の社会機構が全然ないということだ。このような状況が農民たちの現状不満を一段と高める結果を生んでいる。中央平原で共產主義者の細胞が発見され、この地域から住民たちは、ラオスやベトナムの訓練学校に通っていた。いくつかの南部の省で最近数年間に何回か戒厳令が宣言されたが、これには、この地方における農民の不穏状態が原因していると思われる。

アメリカの出現は、タイの国民の間に激しい反米感情をまき起している。保守派の君主制主

義者であるククリット・プラモジヨは彼の発行している新聞『シラム・ラス』紙上において、怒りをこめてアメリカ攻撃を展開している。かれによれば、アメリカ人はタイ国民を経済的に搾取し、多数の売春婦を作りだし、タイの少年たちにホモ・セックスを教え込んでいる。かれの記事は、タイ国民は「お前たちの大使館を破壊し、アメリカ情報局を焼き打ちする。……お前ら、アメリカの獣どもよ、お前たちの穴に帰れ！」という警告で終っている。

タイにおけるアメリカの政策はどうにも手のほどこしようなない矛盾をきたし始めている。一方において、アメリカ軍の出勤は、中国とベトナムの共產主義に対抗するための戦略的軍事基地としてタイを維持するために、また「自由世界」資本のための領域として、タイ経済を維持していくために必要である。その反面、アメリカの軍事的、経済的出現はタイのナシヨナリズムを湧きたて、土地のない農民階級と都市の未熟練労働者階級の出現をもたらし、弾圧的なタイの警察と軍隊の権力を拡大し、その結果、少数民族の間に烈しい敵意を生み出させている。こうした状況が作られているなかで、あるいは従来よりも一段と規模を大きくした革命への道が切り開かれるかもしれないのだ。

〔タイ愛国戦線〕

ゲリラ戦闘日誌（一九七〇・七一—一九七一・二）

——「タイ人民の声」放送より——

ものであり、その後のタイ愛国戦線の活動について、新華社報道によって集録した。

一九七〇年七月（15日）タイ人民解放軍、北部国道テルンチエンコン

前掲の論文「タイにおけるゲリラ

運動」は一九六九年九月に書かれた

開いて待伏せ攻撃と相雷で敵軍三人殺す。〈24日〉同所で地雷でもって敵將校一人殺す。〈25日〉南部スラト省で敵一五人せんめつ。〈31日〉北部タク省の村警備所を攻撃し敵兵四人せんめつし、武器を多数捕獲。ウドン省で戦闘。

八月〈5日〉北部タク省内三所所で待ち伏せ攻撃。〈13・14日〉ファイタムロク省で連続攻撃。敵一〇人せんめつ、ヘリ三機撃破。〈14日〉タク省で国境守備隊を攻撃。〈14日〉ソントラ省ハドヤイ飛行場附近でソープを攻撃。〈19日〉ファタルン省内村警備所を焼きうち、敵兵五人をせんめつ。中部ブラチアブ省で戦闘。九月〈20日〉北部チエンライ省で戦闘、人民解放軍、カイライ知事、警備隊長および第三軍情機司令を殺害。〈23日〉チュライ省でヘリ一機撃墜。一〇月〈6日〉北部フェチャブン省

ファイサイ山中で人民解放軍機銃掃撃機を撃墜し、パイロットを戦死さす。〈9日〉同省で敵の拠点を攻撃。〈10日〉同省で戦闘、一二人せんめつ、タンク一台撃破。〈21日〉チュンライ省でヘリ一機撃墜、南部チャレム省で警官一人殺す。〈22日〉北部国道ナルシーチエンコン間で戦闘。〈23日〉中部フェチャブン省で戦闘。〈24日〉北東部プリラム省で敵七人せんめつ。〈25日〉フィチャト省でCIA専用ヘリ一機を撃墜し、六人(米人を含む)死にさす。〈29日〉南部チコンスピタマラト省でヘリ一機撃墜。

二月〈5日〉南部スラト省で敵の拠点を攻撃。二月〈11・31日〉北部チエンライ省で二〇回の戦闘、敵四五人せんめつしヘリ一機撃墜。〈31日〉ナン省でヘリ一機撃墜。

一九七一年一月〈2日〉北部ファイタムロク省でヘリ一機撃墜。北東部ソコンチコン省で地区警備所を攻撃。〈9日〉南部パタルン省、スラトチエン省などで戦闘。〈12日〉北部チエンライ省で戦闘。〈14日〉タク省でヘリ一機撃墜。チュンライ省で敵四人せんめつ。〈16・17日〉タク省でヘリ二機撃墜。〈19日〉タク省で戦闘。〈23日〉国道ファイサヌロクロームサク間で戦闘。〈24・25日〉タク省で警官一〇人殺し、ヘリ一機撃墜。〈27日〉南部ナラチアット省で戦闘。〈28・30日〉レスラトチエン省で戦闘。〈22・31日〉北部チエンライ省で一六回の戦闘。

二月〈1日〉南部チコンシリタマト省で戦闘、敵軍二四人をせんめつ。〈2日〉ラオス国境チコンファン省で戦闘。〈7日〉北部チエンライ省で戦闘。

SOLIDARITY



RENTAI

